

グランドゼロ

GROUND
ZERO JCF

96 夏

2013年6月26日 発行

- チェルノブイリメモリアルデー
「甲状腺診療の実際」
講演会を聞いて考えたこと
『私の一番の希望たち』
- 福島原発被災者支援報告



JCF

ブライト・オクジャワ（1924～1979）

訳・神谷さだ子

オーケストラは戦闘マーチを奏でる

陽光も夕焼けもない

涙を流さないで、お母さん

わが翼にそんなに涙を流さないで

きびしい予言は信じずに

私達は黄金のときを待っていた

いたずらな鳥から羽が抜け落ちるように

管弦楽が打ち響く

偽りが私達を黙らせた

霧の中を弾丸が咬みついていた

ところが、私達自身は若くて無名

なにゆえに地上でやすらうのだろう

とはいっても音楽は遠くに

知っているメロディを聞く幸せ

出会いは遠ざかり

逃れられない運命が近づいてくる

まるで初めてのように弾丸が口笛を吹く

ゆえに死がそして目をみつめる……

そしてそこに――再び管弦楽団が

管楽器と甘い声が混ざり合う

GRAND ZERO JCF 96夏

目次

チェルノブイリ
メモリアルデー
2013

「甲状腺診療の実際」 講演会を聞いて考えたこと	< 染谷恵理子 >	6
『私の一番の希望たち』 演劇を観て	< 有賀ふく江 >	9
	< 鶴島綾子 >	11
	< 平島安人 >	14
	< 寺平美雪 >	15
たくさんの「～ならば」 公演に参加して	< 日下部英司 >	17
	< 丸山恵利奈 >	18
	< 常田唯衣 >	18
	< 熊谷こえだ >	19
	< 中野将綺 >	
	< 宮澤愛香 >	19

福島原発
被災者支援報告

新しい生き方 新しい豊かさ 新しい当り前	< 横内香苗 >	22
『振替用紙のメッセージから』に励まされて	< 谷田部裕子 >	26
南相馬訪問報告	< 水瀬友豪 >	30
Team めとば 1年間の活動を振り返って	< 浜崎竜太郎 >	32
新メンバー紹介		40
食品放射能測定結果（2013年3月～5月）		42
2013年度JCF通常総会		44

連載 & お知らせ

ドイツマインツの脱原発便り	< 近江まどか >	49
連載随筆「牛の涙」	< 宮尾 彰 >	52
母から伝わる食卓		54
モスクワ便り		55
振替用紙のメッセージから		56
ありがとうございました！		58
「福島原発被災者支援募金」のお願い		61
Здравствуйте！（事務局広場）		62
カルチャーレビュー		64
インフォメーション		66

チェルノブイリメモリアルデー 2013



松本市中央公民館（Mウィング）での蠍ヶ崎高校演劇部公演『私の一番の希望たち』

メモリアルデーの取り組みは、チェルノブイリと福島を結んでいった。高校生の何回も繰り返されたであろう稽古は、張り詰めた舞台に具現化された。たくさんの方々に、そして何よりも今福島に暮らすゲストにも大きな感銘が残った。

チェルノブイリメモリアルデー 2013

遠藤清次医師

「甲状腺診療の実際」

講演を聞いて考えたこと

染谷恵理子



1986年4月26日事故を起こしたチェルノブイリ4号炉 事故後炉を覆うために作られた石棺も老朽化が進む

4月28日、私は娘と松本中央公民館（Mウィング）で開かれたチェルノブイリメモリアルデーという催しに行ってきた。南相馬市で絆診療所を開かれている遠藤清次先生の講演を聞こうと思ったのだ。

遠藤先生はもとも南相馬市の小高地区で地域医療の再生に取り組み、過疎の地にも入院設備のある病院を！と活動されてきた。地域の方々も一丸となつて小高病院を助け、経済的には苦しいながらも皆で病院を守り支えてきたのだ。

しかし、そこに3・11の津波が起こ

り、畳み掛けるように放射能禍が襲い掛かった。

その時の様子を栄養士の鶴島さんと遠藤先生が淡々と語られていたが、神様は何故真面目に取り組んできた方々をこうも苛め抜くのかと、話を聞いていてたまらなくなつた。

その後、遠藤先生は原発から20キロ圏内である小高病院の再建を諦め、いったんは猪苗代の病院に勤められるが、仮設住宅へ避難されていた方々の要望で南相馬市鹿島区に私財を投じて「絆診療所」を建てられたのだ。

講演を聞いて思ったのは、現地の事情を踏まえないで外側から「（くすくす）べき」と説くことに物理的にも心情的にも限界があるということだ。

遠藤先生は前述したように地域医療の再生に積極的に取り組まれてきた。困っている人を捨ててはおけないという立場から、南相馬市に残り現在も診

療活動を続けて下さっている。

これに対して、「何故その地に留まり続けるのか？ 診療所を開いたり、その援助をするよりまずは避難が先だろう」という意見があるのも事実だ。遠藤先生もこれを否定されてはいない。実際、小高病院と一緒に地域医療に携わってこられた同僚の先生は小さいお子さんがおられたため、疎開されたそうだ。

だが、現実に戻してみても、どれほどの人が避難という手段を講じることができるのか。中には介護を必要とする身内を抱えた方も、夫婦揃って共働きでやっと生活が成り立つご家族もある。各ご家庭ごとに抱える事情は様々で、動きたくても動けない現実を前に立ちすくんでしまっている方々も大勢いらっしゃるのだ。

遠藤先生は自分に何ができるのかを考えられた時に、「共にそこに在り続けること」を選ばれた。小さい子供が



Mウイングで講演する遠藤医師

母親になでられただけで体の痛みを忘れてしまうように、先生の絆診療所はお母さんの手のような役割を地域で果たされているのかな、とも思った。

今回、「甲状腺診察の実際」という

題に惹かれて講演会に参加したが、これについては少々肩透かしをくった感はない。

甲状腺癌は手術しないで経過観察するという選択肢がある一方で、子供の場合は転移の可能性もあるので、早期発見・早期治療が大事とも言われている。エコーで異常が見つかった場合は細胞診を行い、そこで悪性ないし悪性の疑いありと診断されると手術が行われるが、実際のところは組織を摘出しなければ、その判断がつきにくい場合があると聞いている。

今回はまさにその現場でエコー検査をしている先生がお見えになるというのでこれらの相矛盾する諸説について先生ご自身はどのように考え判断されているのか……をお聞きしたかったのだが、最後は時間が押してしまいエコー検査のデモンストレーションで終わってしまったのだ。

ただ、先生自身からお話を伺った限



Mウィング講演会で震災当時の話をする、絆診療所管理栄養士の鶴島さん

りでは、現場でも手探り状態で、今後どうなっていくのかの判断までは見て取れないということもわかってきた。あくまでも甲状腺エコー検査というのは現在の甲状腺の状態を映し出すものにすぎないのだ。

誤解のないように申し添えると、今回は時間の制約もあつてお話いただけ

なかっただけで、絆診療所では県に行った甲状腺スクリーニング検査の結果を画像を見ながら説明してくださっているそう。もし直接出かけることができるなら、定期的に先生のところで甲状腺を診ていただくことで少しは不安も違ってくるのではと思う。

放射能による被曝の影響については本当に諸説入り乱れていて、調べれば調べるほど深い穴に落ち込んだ気持ちになることもしばしばだ。そしてその厄災を避けるために何ができるのかを考えると、いちNPO法人だけでは、すべての人を救い上げることは不可能に近い。

遠藤先生は「そこに在り続ける」という選択をされた。自身の手で現実に行えることを実践されている。私たちができることは、「ここに手を貸そうとしている人達がいるよ」と声を上げ続け、望む人に望む形で援助をし続け

ること。そしてつながり続けることなのではないか……。そう思った一日だった。

後日以下の本を入手しましたが、とても参考になったのでお知らせします。

『原発事故と甲状腺がん』

菅谷昭・著

冬幻舎ルネッサンス新書

『私の一番の希望たち』

松本蟻ヶ崎高校演劇部公演

昨年蟻ヶ崎高校演劇部は、顧問の日下部英司先生書き下ろしの、チェルノブイリ原発事故で亡くなった消防士の家族の物語『私の一番の希望たち』に取り組みました。今年1月蟻ヶ崎高校図書館でこの作品最後の公演があるとのお知らせがあり、観せて頂きました。

事故を起こした福島原発もつぎはぎの補修を繰り返し廃炉作業の見通しも立たないのに、経済優先を目くらましに、停止中の他の原発も再稼働の動きが濃厚です。元気の出ないニュースばかりだった時、この舞台に取り組む高校生の真摯な姿はとびきりの「希望」に思え、今年の4・26のイベントで是非この演劇を上演したいと思いました。

日下部先生にお願いしたところ、3月で主要なキャストを担当する3年生が卒業して、部員も6名だけになってしまうので、4月の再演は難しいとのこと。でも一応部員に諮ってみますと言って頂きました。先生からお話を通して頂いた後、直接演劇部員の皆さんにお会いしてお願いしたり、大道具の運び込みをTeamめとばに依頼したり、いろいろなやり取りのなかで、Mウィングでの公演が実現しました。

当日の公演を観て下さった方と演劇部の皆さんの感想をお伝えします。(事務局・布山)

有賀ふく江（原発のない未来をめざす会）

想像力をかきたてられる極めてシンプルな舞台でした。素劇^{すげき}というのでしょうか。大道具は、その間を役者が出入りする正面の3枚の大きな壁。観客は終盤の台詞から「壁」が大きな意味を持つことに気付き、この凝った塗装の壁の存在感を改めて感じるという仕掛けのように思えます。小道具は数脚の椅子のみで、ベッドにもさまざまな段差にもなります。衣装は抽象的な太いラインを引いただけの黒のTシャツと黒のパンツで、個性を消されています。

役者は一人で何役も受け持ち、場面ごとに役を替えます。しかも場面転換には幕も暗転もない。例えば今までお母さんだった役者が、その優しい表情と所作を、硬くきびきびとしたものに変えるだけで、瞬時に原発の作業員に変身する、というように。これで観る者を混乱させないのですから、見えないところに演出の工夫や厳しい稽古があることは確かです。

上演の一週間後、JCFでのパーベキュー・パーティーで演劇部の皆さんと同席しましたが、その時はTeamめとばのお兄さんたちと鬼ごっこで大はしゃぎ！ シリアスなお芝居の時とは正反対の、あどけない高校生の素顔を見

せてくれました。

チエルノブイリの事故は27年前、ということとは、演じた皆さんのお父さんお母さんはまだ高校生だったかもしれない、そんな一世代昔の、遠く離れた場所での出来事です。しかし今回の上演会場の客席をいっぱい埋めた人たちは、この事故をモはや「遠いこと」とは思えず、演劇部の皆さんの熱演に涙をぬぐっていました。フクシマの事故は私たちにチエルノブイリを一気に現前化してしまったからです。チエルノブイリを忘れてはいけないと言いますが、しかし、忘れていられた間はある意味で幸せでした。今の高校生は、いわば目の前で、自分自身も被害者になりかねない事故が起きたのですから、見ないふりをしたり忘れたいはできないでしょう。ましてプリピャチの家族の小さな幸せがどのようについたか、一生懸命考え演じた演劇部の皆さんは。

27年前の私自身のことを思い出すと、放射線の影響についてまったく無関心でした。3人の幼児を育てていたのに、健康被害など全然心配せずただ慌しく過ごしていました。翌年4人目の子どもが生まれたときも、放射能に関して何の怖れも抱かなかったのだからのんきなものです。今、福

島県ばかりでなく関東地域などからも、放射能の被害を避けるため、子どもさんを連れた若いお母さんたちが各地に移住しています。その方たちの真剣さ、勉強ぶりに比べたら、まことに恥ずかしい無知です。また、現在脱原発のために活動している、私の同世代の友人たちは、多くその活動をチエルノブイリ直後に始めています。さらに、坂田静子さんの著書『聞いてください 脱原発への道しるべ』によれば、坂田さんは既に1977年に、一人で原発の危険性を訴えるガリ版刷りのチラシ「聞いてください」を作り、配り始めたとのことでした。

こうした人たちに共通するのは、その行動の出発点が自分の子や孫が危険にさらされることを怖れる……ひとりの思いであつても、そこにとどまっていけないことです。

原発のことを学べば学ぶほど、核は誰の生命をも脅かすものであることを知り、また原発を推進し容認してきた社会構造が黒々と見えてきます。原発は原料の採掘からゴミの始末に至るまで、あらゆるプロセスで弱者を犠牲にせずに成り立ちません。このような仕組みがこのままであっていいはずがないし、自分の子孫だけが危険を避けられるはずもない、全ての現在と未来のいのちを守らなくてはならない……そういう強い意志を固め持続してきたことに敬服します。私は周回遅れながらこの2

年、原発のない社会をめざす仲間伍していきたいと思っ
てきました。

鶴島 綾子

よく「3・11以後」「フクシマ以後」という言葉を聞きます。ここには、自分の生き方も世界のあり方も、これまでは違うものになくってはならないという切実さがあります。しかし人々がチェルノブイリをいつの間にか忘れた
り無関心だったことで、「チェルノブイリ以後」は「フクシマ以前」になってしまったのでしょうか。これを繰り返す
ことなく、次の時代は「脱原発以後」と画されるべきです。
今のこの時代を「核の電力があつた頃」と呼ぶことができる
ような日を、高校生の皆さんがめざしてくれることを願
います。



演劇の舞台に使われた「マリア像」モニュメント

4月28日、松本蟻ヶ崎高校演劇部による『私の一番の希望たち』を鑑賞する機会を与えていただきました。

上演の約1時間、私は自分の体験と重なり、あの東日本大震災での出来事、心の葛藤が走馬灯のように頭をよぎり、まさに私の伝えたいことが高校生の演劇によって溢れかえったのを今でも忘れられません。

27年前に起きたチェルノブイリ原発事故、以前の私はこの事故について「原発事故によって膨大な放射性物質が放出された。高線量の町には今でも立ち入ることができず、子供たちの小児がん、甲状腺がんが増えた。原発事故は恐ろしく怖い」という認識くらいでした。

忘れかけていた悲惨な事故が、東日本大震災、福島第一原発の事故によって私の記憶からよみがえり、原発事故は恐ろしいだけでなく、家族、地域、すべてを奪うものだと確信しました。

チェルノブイリ原発事故で犠牲になった29人の兵士と消防士たちは、大量の放射線を浴びて被ばくし、家族に逢うこともなく石棺に納められ、モスクワ北部の墓地に眠っています。消火作業が終わったら我が家へ帰ってくる、だか

ら避難する訳にはいかない。帰りを待つ家族は言葉では言い表せないほどの不安な思いに駆り立てられたに違いありません。

私の住んでいた福島県南相馬市小高区は、福島第一原発から18 kmの場所にありました。

2011年3月11日の震災、原発事故によって人生が大きく変化し、住み慣れた故郷を失いました。

家族は、夫と当時高校3年の長男、中学3年の長女、小学6年の次女の5人暮らしです。私は近隣にある南相馬市立小高病院で管理栄養士として働いていました。原発から18 km、海岸から4 kmの地点にあった病院の周辺は、地震と津波によって壊滅状態となり多くの人々が犠牲となりました。

翌日の3月12日には福島第一原発の放射能漏れによる避難勧告となり、津波の被害にあった人々を救出することもできずに住民全員が我が町から避難していきました。

私たち家族も同様に避難となりました。病院に泊まり込んでいた私は南相馬原町区の病院に残り、夫と子供たちは先に避難し、約1カ月の間に宮城県、千葉県の親戚宅、福島市あづま体育館、福島県二本松市へと移りました。

子供たちの学校は、地元での再開が困難となり、長男の高校は県内5カ所の高校へ間借りしたサテライト校、娘た

ちの小、中学校も避難先の教育委員会会で手続きを取り、それぞれが二本松市の学校へ転校しました。

当時、私が勤務していた病院には68名の入院患者があり、半数は寝たきり状態だったため、患者全員を避難させることは大変でした。

3月13日、原発から23 km地点の病院へ無事に避難したの



2011年6月小高病院に入った、右から鶴島さん、遠藤先生、鎌田理事長

も束の間、3月14日午前11時に福島第一原発3号機の水素爆発が起こり、3月19、20日の2日間で患者全員を県内外へ再度避難させました。

その後、近くの避難所で医師たちに同行し巡回診療をしておりましたが、勤務していた小高病院の再開の目的が立たず、私は解雇となつて家族が避難していた二本松へと移り、慣れない土地での避難生活を体験しました。

現在、私は原発から約30km地点の南相馬市鹿島区の借り上げ住宅で生活をし、診療所で働いております。2012年5月1日に、仮設住宅の近くにプレハブの仮設の診療所が開院しました。元小高病院院長の遠藤先生が、仮設住宅に暮らす人々に寄り添った医療を提供したい、と始めた診療所です。

絆診療所と称したこの診療所には、避難生活を続ける方々が不安を抱えて訪れます。「先生の顔を見たら元気がでた。ここに来れば癒される、言いたいことが話せてスッキリしたよ」そう話してくれます。

震災から3年目に入りましたが、私たちの避難生活は継続中です。

これから先、どんな生活になるのか見当もつきません。国は、汚染された故郷に帰還させようとしています。2年以上も人が住まなくなつた町は荒れ果て、インフラ整備も

進まず、収束していない原発を背後に生活ができるものでしょうか。

このような状況の福島から招かれてイベントに参加した私は、今回の松本蟻ヶ崎高校の演劇に見入ってしまいました。現在のチエルノブイリの状況は、27年後の我が故郷を見ていると錯覚してしまいます。

それでも国は原発の再稼働を検討し、経済を優先しようとしています。私には、この福島の悲惨な出来事が忘れ去られていくのではないかと不安がよぎります。復興、復旧など、まだまだ進んではいけません。もっと現実を見てほしい、そしてチエルノブイリや福島の悲劇を再度起こしてはいけません。

最後に、今回の松本蟻ヶ崎高校演劇部の感情あふれる素晴らしい熱演を鑑賞できたことを幸いに思います。

平島 安人（信州気候フォーラム代表

この劇を観て本当に良かった。心からそう思いました。劇そのものの良さはもちろん、この劇に出会えたという縁もまた良かったことであり、とても感謝しています。

松本に「かえる311」という集まりがあります。名前が示す通り、3・11を経験し「何かしたい、何かせずにはいられない」という思いで集まった人たちのゆるやかなネットワークです。4月23日にかえる311のミーティングを開いたとき、JCFの布山さんから、劇上演の紹介がありました。

すでに情報としてはかえる311メーリングリスト上に流れ、「時間があれば」行ってみようかと思っていました。でも布山さんの話は、「時間を作って」行こうという気持ちへと変えてくれました。

劇との出会い、メモリアルデーでの上演となるまでの経緯、高校生たちの決断や思い、この劇をきっかけに新入生が10人も演劇部に入部した話、それらを布山さんの言葉として聞き、ぜひ観たいと思いました。布山さん自身の劇への熱い思い入れや多くの人に観て欲しいという強い願い、それなくしては、劇とよくとをつなぐ縁は生まれませんで

した。

前置きが長くなりました。実は劇を観賞した日、ぼくは自分のブログで感想を綴っています。ホットな感想だと思うので転記します。

1986年4月26日の時に何があったのか、原子炉の運転員は、消防士は、市民は。それらを小気味良いテンポで演じてくれた。消防士の話が、この劇での主軸になっている。あの事故の時、おそらく真の危険性も知らず、知らされず、防護服もつけずに現場に突入し放射線障害によって命を落とした消防士たち。消防士のことは知られた話ではあるものの、チェルノブイリの話の中で取り上げられたのは意外と目にしない。この劇は消防士を大きくとりあげ、原発の致命的な問題点をえぐりだしていると思う。創作台本とのことだったが、いくつかのテーマをうまくからみあわせ、まとめあげたものだと感じた。さて、劇の題名である『私の一番の希望たち』とは何だったのだろうか？これはまだぼくの中では謎のままで。あわてて結論を出さずによく考えてみたい。

セットらしきものはなく、椅子だけ。椅子を効果的に使

い、椅子が椅子ではなく別のものに見える不思議な経験をさせてもらいました。何より高校生の真剣さに引き込まれました。

タイトルがなぜ『私の一番の希望たち』なのでしょう。ラストシーンは、希望を持ち自分のやるべきことをやる、という意味のセリフだったと記憶しています。これかと思いつつ、さらに深い意味もあるように思えてなりません。

1986年には生まれてもいなかった彼らがこうして演じることに大きな意味があると感じました。伝えるべきものを伝える、ぜひ演劇部の財産としてこの劇を継承してもらえればと強く願っています。原発には何の責任もない彼らがいることを演じている、その一方でぼくら大人世代はどうなのか。大人の責任を問われる劇でした。

寺平美雪（松本市在住）

チェルノブイリ原発事故を知らない世代と現代の高校生を持つエネルギーを感じながらの観賞。

最初に、チェルノブイリ原発事故に向き合い表現した若い人たちの勇氣に敬意を表します。

これからを担う若い人たちがこの取り組みを通じて原子

力発電というエネルギーについて、「自分たちの問題として考えてくれるきっかけになるといいな」そんな希望を抱きながら今回の公演を観させていただきました。

チェルノブイリ原発事故が起きた当時私は18歳でした。事故のことはラジオやテレビを通じて知り「異国ソ連の原子力発電所で起きた事故。その事故の影響による被害が日本にも流れてくるとか。食べもの、水や空気……一体どうなってしまうのだろうか？」と一瞬恐ろしくぞっとするような恐怖を感じたことは今でも覚えています。ですが実際に事故による被害がもたらす影響と被害の大きさを想像することはもとより、とてつもなく問題が大きかったため、自分の考える問題として捉えることができませんでした。

今回の演劇公演は当時の事故前後の様子を原子力発電所で働く消防士とその家族という設定で、リアルに表現されていました。

事故により生活は一変します。原子力発電所の仕事に携わっていることで手にしていた裕福な暮らし。しかしそれはどれほどの危険と引き換えに手にしていたものであったか。『あたりまえ』の生活と毎日が、どれほど大切でどれほど尊いものだったか。『あたりまえ』のように毎日顔を見て暮らして過ごしている人の存在の大きさに失ってから気が付かれます。放射能が人体に及ぼす影響の怖さを事故が

起きてから知る、それはあまりにも大きな犠牲のもとに成り立つ、取り返しのつかない事実とやり場の無い憤り。私たちの身近にある「命の大切さ」の意味と照し合せながら感じました。

2011年3月11日東日本大震災による福島原発事故が起ころるまで想像もできずにいた日本での放射能による被害。福島に住む私の親戚は「原発は安全で安心。便利で私たちの暮らしを豊かにする」と言われ続けその言葉を信じてきたと声を震わせながら話しています。

私の取り組み

今回の観劇公演等の影響も受け「私にも何かできないか」と考え、来る7月21日（日曜日）、『福島 六ヶ所 未来への伝言』上映会（会場：松本市Mウィング）を企画しました。映画は被災した福島の住民の今と、青森県六ヶ所村核燃料サイクル基地周辺に住む地域住民を追い続けたドキュメンタリー。

放射能の危険を恐れ今も反対し続けている住民と、原発によって豊かになったと語る住民の双方を取り上げていることも映画の特徴の一つです。「いのちのバトンを渡すのか？ それとも放射能という負の遺産を渡すのか？」

映画を通じ私たちの取る行動と責任が問われています。若い人たちに残したい未来を想像し、自分たちにできる精一杯の行動をとりたいたいものだと考えます。



『私の一番の希望たち』の舞台上で熟演する蠟ヶ崎高校演劇部

たくさんの「～ならば」

日下部英司（松本蟻ヶ崎高校演劇部顧問）

高校の演劇部に出来ることは、ごくわずかです。

私の持論で、高校の生徒会でも演劇部でも、社会的な存在の一つなのです。しかし、出来ることは本当にごくわずかなことで、今回に関して言えば、自分たちの劇をきちんと創作し、上演するだけです。他にできることはなく、でもそうであるからこそ、ご覧になった観客の方々は、自分の状況に移し変えて受け取ってくださるのだと、私は部員諸君に言ってきました。価値は私たちが作っているのではなく、ご覧になった観客の方で作られているのです。

さて、そんな当たり前なことですが、私たちにとつては大きな経験になりました。

いつもは大会や文化祭での上演が精一杯ですが、今回は学校の枠を通り越して、もっと広い社会の中でのいろんな年代層の皆さんに見ていただいたということ。JCFの皆さんとのつながりが出来て、自分たちに無理のない社会的な貢献の仕方が見えたこと。自分たちの話をすれば、おかげ

さまでテレビやラジオに取り上げていただき、学校の授業に入っていけば、教室の生徒から笑いと声がかかること。1年生の新入部員にも、入ったばかりの部活で、活躍の場面ができたこと。とりわけ、福島からおいでいただいた方々にご覧いただいたことは、忘れがたい経験です。

せっかく出来たいくつものつながりを、そのままにするのはもったいない話です。いろんな形でこれからもお付き合いをいただきたいものです。

それには自分たちから一步を踏み出すことも大事だということ、今回は学びました。学校の図書館での公演をしなかったら、その場にJCFの方をお招きしなければ、卒業生の分を後輩に当たる現在の部員が引き継がなければ、今回のメモリアルイベントには上演できなかったわけですから。（良いことでも悪いことでもそうなのでしょうが）一つの出来事は、たくさんの「もし～ならば」の積み重ねなのです。

そして、自分たちのできることの、限界と可能性の両方を見失うことなく、これからも何かを続けたいと思います。

この場をお借りして、当日のご来場の皆様に、あらためて御礼を申し上げます。

今回のメモリアルイベントでは、自分達の作品を外部の方に見ていただくという、大会や校内公演ではできないような貴重な体験をさせていただきました。

最初に公演の依頼をいただいたときは、部員数の問題や、見てくださる方々の視点とこの作品が釣り合うのか等、不安な思いがなかったわけではないですが、ここでやらなかったら後悔するような気がなくなりましたし、挑戦してみたいという気持ちが大きかったように思います。

『私の一番の希望たち』は、自分達が社会を見つめる一つのきっかけになった作品です。それをメモリアルイベントで一般の方々に向けて上演できたことは、私にとつては本当に新しい経験でした。JCFの方々や蟻高演劇部の仲間、応援してくださった方々の力があつてこそ成り立った舞台です。本当に感謝しています。

私が社会に出たときに、この経験をまた思い出せたら良いなあと思います。

始め私は、メモリアルイベントで上演するのはあまり気が進みませんでした。何故なら、出演できる人が減ってしまい、上演できるのか不安だった上に自分自身のモチベーションも悪かったためです。しかし、この依頼を断ったら必ず後悔するだろうとも思っていました。正直、先生が勝手に上演すると決めてくれたらどんなに楽だったことか。でも布山さんに会って、話を聞いていくうちに、だんだんやりたい気持ちの方が強くなりました。

本番の数週間前は思うように練習ができませんでした。学校の公演と時期が重なっていて、別の台本も練習しなくてはならなかったからです。だから、一回一回の練習を大切に行いました。回数を重ねてきたためか、私には絶対に失敗しないという自信がそのときにはありました。

リハーサルの日、私は初めてMウィングを訪れました。そのときに、使用する道具も中に入れました。道路が狭くて、トラックから大きな道具を降ろすのは時間もかかるだろうし大変だと思いましたが、手伝っていたいただいた方々のおかげもありスムーズに運び入れることができました。リハーサルを行う時間が近づくと、緊張もだんだん高まってきました。でも私は、リハーサルを緊張感を持ってやるこ

とにより、本番で緊張に押しつぶされずに済むのだと思います。そして迎えた本番。緊張はしていませんでした。それよりも私はお腹が痛くて辛かったからです。本番前にお腹が痛くなるなんて、自分で自分に呆れました。ですが、舞台上にいるときは不思議と痛くなくて、早く出番になってくれと願っていました。

私が思うに、本番は成功です。終わった後、受付の近くであいさつをしていました。そこで初めて、こんなに大勢の方々が見に来てくださったのだと知りました。中には感想を言うてくださった方もいました。それを聞いて私は、上演してよかったなと思いました。

この公演が何かのためになったはずだと、私は信じています。

熊谷こえた（演劇部3年）

約1年間という比較的長い期間取り組んできた『私の一番の希望たち』という作品と、チエルノブイリ原発事故という題材ですが、本当の意味で私たちが出来ることは、今までよりもこれからにあるのではないかと思います。

チエルノブイリ原発事故を題材にした劇に取り組んだという経験は、私たちの将来に、役に立つ場面がきっとある

のだと思います。そしてそれが、劇を観た方にも同じことが言えるならば、本当に嬉しく思います。

この作品に取り組み始めた頃は、いろいろと悩んだり、プレッシャーに感じることもありました。まだ十代で、何事にも経験の浅い私たちが、決して中途半端な気持ちで取り組んではいけない題材ですし、理解しきれない部分も少なくないと思います。

ですが、いくつもの公演を重ねていく中で、やっていて良かったと思うようになりました。今回のメモリアルイベントは、それを最も感じた公演でした。

一つの演劇部という単位で、オファーをいただき、公演をするという貴重な経験をさせていただいたことを、本当に光栄に思います。ありがとうございました。

中野将綺（演劇部3年）

今回のチエルノブイリ公演は、とても貴重な経験でした。僕たちの劇を見て頂くのは、ぎんが祭のときと大会のときぐらいしかないので、今回の公演は僕たちのことを知って頂けるチャンスだと思いました。また、見た方に感動だけでなく希望なども感じて頂けたかなとも思います。

ですが、それまで被災した方や、実際に原発に関わった方に劇を見て頂くことはなかったので、公演の依頼を受けたときは不安がありました。言ってしまうと所詮高校生の演劇なので、被災者のつらさを伝えるには限界があります。けれども、そんな高校生の僕でも誰かを励ますことができるのならやる価値は絶対にあると思う公演をやりたいと思いました。

また、準備や片付けをTeamめとばの学生さんが手伝ってくれ、作業の合間には大学の話を聞きました。自分の進路を考えるいいヒントになりました。

このように、普段できない経験ばかりで、すごく充実した時間を過ごさせて頂くことができました。いろんな方に支えられて今回の舞台を作ることができました。ありがとうございました。

宮澤愛香（演劇部3年）

わたしは、サーシャの恋人のピクトリアと、サーシャのお母さんのニーナという役をやらせていただきました。この劇は、去年の文化祭から始まり、大会、本校の図書館公演まで、約1年間、やって来たのですが、それまでニーナ役をやっていた先輩が今年の春卒業してしまい、わたしは

ニーナの役を受け継ぐということになりました。

正直、初めは、ニーナは自分とは全然違う性格だし重要な役だし、出番も多く難しいパントマイム的なシーンがあり、とてもプレッシャーが大きくて、自分には絶対無理できないと思いました。

またニーナは外国人女性で、特に強い性格だったので、まず立ち向っていくのに「絶対ひかない、負けない」というような、揺らがない感覚を掴むことに苦労しました。でもニーナの役をやっていく中で、今まではやったことのない事ができたり、小さな事だけど新しい発見が何回かあったりしてわたしにとって学ぶものが多い役でした。

わたしはまだ未熟なので、甘かった場面も多々あったかもしれません。でも、今わたしのできることを精一杯やりました。伝えきれたと思います。当日はたくさんのお客さんや蟻ヶ崎高校の先輩方、先生、家族が見に来てくださっていました。お客さんの中には涙を浮かべている方もいて、人に感動してもらって、すごいことですよ。ね。なんだか自分も感動しました。この時の感覚は、これからわたしの中で消えないですと残っていると思います。

メモリアルイベントという舞台は、わたしにとってとても貴重で、大きな経験でした。

福島原発被災者支援報告



作付け禁止で草刈りされたまま何も植えられていない、南相馬の田んぼ

厳しい避難生活続ける人。
苦渋の選択の末に現地に残った人。
皆で支え合っていきたい！

新しい生き方 新しい豊かさ 新しい当り前

横内香苗（事務局）



南相馬道の駅に泳ぐ鯉のぼり

2012年5月から始まり、2サイクル目のガラスバッジプロジェクトが1年を終えた。5月27、29日、福島市、郡山市、南相馬、二本松市の団体へのガイガーカウンター貸出し支援の更新と経過調査も含め、3カ月ぶりに福島を訪れた。

最初の訪問は福島市の市民放射能測定所CRMS。昨年11月から年齢も環境も異なる10人の方にガラスバッジを装着していただいた。自治体が行っているガラスバッジのデータと比較したり、環境によつての違いを実感していただけた。

CRMSは震災後いち早く食品検査機、ホールボディカウンターを備え付け、測定を開始し続けてこられた団体だ。内部被曝検査も全ての人が調べているわけではない。2年も過ぎると放射能を気にしない空気もある。市民測定所は商店街の中のビルの一角にある。靴を脱げば即測定できる気軽さが

あるので「ちよつと測つてくるね」ぐらいの気軽さで利用していた、だいたいと思う。ガラスバッジは7月から3カ月ごとの測定に変更して継続測定する。

福島市から車を走らせ南相馬へ向かう。通い慣れた道だが線量は常に気になる。新緑の眩しい峠道、藤の花が木々の緑に溶け込むように咲いていて美しい。放射能さえなければ……と思ってしまう。

南相馬に入ると昨年比べ街に人が戻つて来たせいか、普通の日常生活が営まれているように見えた。震災後の2011年5月から訪問を続けてきた原町中央産婦人科を訪ねた。院長であった高橋享平先生は残念ながらご病気のため今年1月にご逝去された。その後病院がどうなっているのかが気になっていた。

福島原子力震災の起きた2011年5月から享平先生の下に通う妊婦さん

らにガラスバッジを装着していた。JCFとして最初はなるべく放射能を避けて避難していただきたつもりで始めたガラスバッジ装着だったがほとんどのお母さんたちはそこに住むことを決め、この街で出産をした。

ガラスバッジの線量は毎月々測定し、享平先生のアドバイスを頂きながら2年目を迎えた。6人の方が2年目も装着を希望し、測定と報告を繰り返してきた。そんな矢先の享平先生ご逝去の知らせ。持病があることは存じ上げていたが、いつも希望を語ってくださる先生のお話をもっと聞きたかった。しかし南相馬の人々は生前の先生のご指導を希望に変え、懸命に命をつないでいる。

今回病院を訪問したら、新しい先生が赴任され、病院の名前も「南相馬中央病院」と変わっていた。病院の裏には生前享平先生が構想していた野菜プラント用のビニールハウスが建っている。



野菜プラント実験中のビニールハウス

た。即実行する先生のご意思がしっかりと手渡されていると実感した。震災後に生まれたお子さんも成長し、お母さんも働き始め、環境も変化している中、ガラスバッジは目安になったと装着したお母さんが感想を述べてくださった。放射能を気にしていないのではない。気かけながら日々の生活を工夫している。50人で始めた南相馬でのガラスバッジの装着は6月から17人になる。今後は郡山市、福島市の方への装着も継続する。

その後同じ市内でガイガーカウンタ

ーを貸出している「キッズサポートか のん」を訪問する。かのんの皆さんとは4月に東京で開催された「アラブチャリティーバザー」でお会いしたばかり。活動に共鳴したアラブ大使婦人の会の大使婦人たちはバザーの収益をかのんを始め3つの団体に寄付をした。国を超えての支援は今後も続くだろう。震災後に出来た施設であるが、この夏、手狭になった施設をもう一つ増やすとの事。地域に必要とされている施設だ。

2日目、ボランティアの谷田部裕子さんと共に郡山市内のお母さん達のグループ「3a郡山」を訪問した。

3a郡山にはガラスバッジやガイガーカウンタを貸出している。週に一度集まる時間を設け、放射能に関わる勉強会を続けている。さすが勉強を重ねているだけあって放射能に関する知識も豊富である。その中で日々暮らし方を選択していくこともまた大変な事

だと想像するが、ここに仲間がいることはとても心強いと思う。

お母さんたちは子供の保養を希望しているのですが、この夏は是非郡山から信州への親子の保養を実現させたい。

「ガラスバッジは知るための物。安心のためではない」と話すお母さんの言葉を聞いて、向き合う姿勢を応援したいと思う。

郡山から再び南相馬に向かう。南相馬市立病院でホールボディ検査を行っている坪倉医師を訪問。JCFでは坪倉先生が内部被曝を測定した一部の方にガラスバッジを提供している。

「ドイツが原発政策を方向転換させたのは教育のおかげである」とおっしゃり、教育の必要性を訴えておられた。先生はお忙しい最中、中学生への放射能に関わる出前授業も行っている。内部被曝と外部被曝との関連性は薄いことが分かりはじめた。内部被曝はとにかく食べ物に気をつければ避けられ

る。「検査の結果をどう判断するかが課題である」と先生。

南相馬市では、小学生、中学生、高校生全員が内部被曝検査を受けられることになった。市内の渡辺病院を訪問したその日も地元の中学生在がクラス単位で測定に訪れていた。一般の市民でも内部被曝検査を行っていない方は是非受けて欲しいとおっしゃっていた。

力は底から湧いてくる

続いて除染研究所の箱崎さんを訪問。箱崎さんは震災前、林業のお仕事に携わっていた。写真を見せながら震災前の南相馬の様子を話してくださいました。子供が馬に乗って御本陣山の林の中を歩いたこと、まちづくりのために「まちなか広場」を作ったり森の手入れをしてきた事などなど。

実は箱崎さん訪問の前日、偶然にもその森を歩いた。「水芭蕉の群生」と

書かれた看板を見つけ歩きたくなったからだ。車を止めて森の中に入っていると木々の緑が色濃くて、鳥も鳴いて気持ちがいい！ 南相馬にこんな場所があったなんて！ 花も咲いているし、ここが汚染されてしまったとは思いたくない。震災前の写真を見せて頂いた。自然の中で学習する子供も大人



森の中で学習する震災前の写真

も輝いている。今では嘘のように閑散とした森。震災前はここで野馬追いの練習をする子供たちの声が響いていたのだ。

「放射能は時間を殺す」と言ったシユテルナー博士の言葉を思い出す。でも箱崎さんらの除染研究所は負けない。震災直後から「記録は財産」と言って細かく放射能の測定と除染を繰り返してきた。1つの場所で7回も除染・測定を繰り返した場所もあるという。大手ゼネコンの除染とは比べ物にならない。悔しい思いをたくさんしてきただろう。

「震災前はビジョンが無かった。今は地産地消、フラットな社会、環境調和の実現などの夢がある」

「心配。ただここに住むことを決めたから除染をして暮らすことを選んだ」という箱崎さんの口からは未来の話しか出てこない。

再生エネルギーの里山の構想、交流

ツアー、再生エネルギーファンドのこ
となど、いつも前向きで聞いているこ
ちらもワクワクしてしまう。

経験した人にしかわからないであろ
う底力。震災前に戻るには「新しい生
き方・新しい豊かさ・新しい当り前」
が必要。「生の情報での社会造りが成
り立っていない」「子供の遊びの本質、
教育の本質」を問うことが日本の課
題！ とはつきりおっしゃった。

宿泊でお世話になった高橋美加子さ



ミントティーをいれる高橋美加子さん

んが「震災前に採って作っておいたの。
これが最後」と言ってミントティーを
煎れて下さった。乾燥したミントが小
さな瓶に入れられていた。

目の前にあるものがこれで最後……
なんて想像したことがあっただろう
か。切ないけれど貴重なミントティー
を大事に頂いた。震災直後は鹿島区で
作られた塩も買い占めたそう。鹿島
区では昔ながらの製法で塩も作ってい
たのだった。

高橋さんは、ジョアンナ・メイシー
の言葉を借りて「絶望こそが希望であ
る」と何度も繰り返した。除染研究所
の箱崎さんのお話も絶望を経験したか
らこそ湧いてきたビジョンだと思っ
た。

「力は底から湧いてくる」。

*ジョアンナ・メイシー

1929年生まれ。カリフォルニア統合学研
究所において、仏教と社会運動、エコロジ
ーの融合に取り組む。著書に『絶望こそが希望
である』『世界は恋人 世界は私』他。

『振替用紙のメッセージから』

に励まされて

谷田部裕子

（線量計貸出プロジェクト現地渉外担当）



南相馬ふるさと帰帰支援センターでガイガーの貸出をする谷田部さん（右）

私は東海村臨界事故以来JCFにお世話になっている会員で、東海第二原発から7キロに住んでいます。福島出身で、福島支援の現地でお手伝いをしております。被災地でもある茨城原発現地と福島とを行き来しながら、折々に現実の重さに直面する日々です。

ともすれば気落ちしてしまいそうな時に励みになるのは、どこに出かけても出会える子どもたちのキラキラの笑顔と、3・11以降ぐんと増えた「いのちが一番大事」の仲間たちの存在、そしてグラントゼロ掲載の皆様からのメッセージです。

どこのだなたかもわからない方々からのほんの数行のメッセージに、今までどれほど力づけていただいたことでしょう。毎号、一つ一つをつぶさに読み、時に涙し時に膝を打ち、いつも心の中で御礼申し上げ、お返事をしておりました。線量計やガラスバッジの貸

与を受けている方々からも、ご支援への感謝の言葉をいただいています。

被災地支援に心とご寄付を寄せてくださっている皆様、ほんとうにありがとうございます。これからもどうぞよろしく願いいたします。

思えば、チェルノブイリ支援では日本人の私たちは差し出す側だという認識でした。

同じ地平に立った今は、過酷事故から四半世紀を生きてきたチェルノブイリ被災地で何が起こり、人々がどう対処してきたのか、社会はどう支えてきたのかを学びつつ、私たちがどう生きていくかに向き合うことになりました。

福島第一原発事故の被災地（福島ばかりではないことは衆知のこととなりました）では、私を知る範囲だけにおいても問題は多岐に渡り、各人がおかれた状況もその受け取り方も、講じられた

支援対策も、それぞれに違っていて、分断が生じています。

時が経って、慣れもあり、緊張し続けることにも疲れて、復興のスローガンのもと、放射能被害関連の重苦しい話題は語られることが減ってきたように感じています。でもこれもまた、毎日を生きて行く中で必然のことです。そんな中で、本音を言えない疎外感から沈黙しがちになる人もいます。

双方に、ほんとうの言葉が減ってきていて、悲しみや落胆や無力感ばかりか祈りや希望もが、「語られないこと」の下に沈んでいっているように感じるがあります。

一方、声を挙げ行動する人々もいます。

各地の市民測定室や子育ての場では、被曝防護策の真摯な取り組みが続いています。学校現場では給食の食材や野外活動の実施をめぐって、心配する保護者が要請交渉を重ねています。

また、加害者の責任追求をすることで被害者の尊厳を取り戻そう、事故を起こした大人世代として責任の所在を明らかにしようと、大勢の人々が国の担当官と東電の幹部を告訴しました（福島原発告訴団）。

年間被ばく許容限度１ミリシーベルト以下の場所ですら子ども達を教育することを求めた訴訟（ふくしま集団疎開裁判）も起こされました。経済的損害のみならず、自殺された方や避難途中で亡くなられた命についても、いくつもの損害賠償請求も起こされました。かつてチェルノブイリの被害を矮小化したといえる国際原子力機関のIAEAがいち早く国や福島県と提携を結び協力体制についたことに対しても、監視と対話を期して市民グループが立ち上がっています（フクシマアクションプロジェクト）。

そして同時に、暮らしを立てようとする、いつにもどこにでも普遍的な頑

張りも、日常生活の営みを続ける穏やかさもまた、営々とどっしりと在り続けています。

食べ物の選び方も、暮らし方行動のしかたも、人によって差があります。避難をとってみても、させられた人、した人、したくてもできない人、したくない人、迷っている人、必要性を感じない人、よくわからない人……いろいろです。

長年にわたり社会生活をともししてきた地域共同体が、かくもあまねく差異にみまわれたことが、かつてどれほどあったのでしょうか？

差異がある中でも皆に共通している一つは、程度の差こそあれ先行きへの不安を抱えていることだと思えます。

すべてを奪われ避難を余儀なくされた方々は無論のこと、低線量汚染地域に

住み続ける人からも、その周辺の人からも、今は大丈夫と思っている人からも、様々な先行き不安が聞かれます。

もう一つの共通項は、皆、「できることなら」住み慣れた地域で健やかに暮らし続けたい、平安でいたいということとです。豊かな自然、美しい山々、美味しい食べ物、のんびりした気質は、故郷を離れて生活を築いている者にとってさえも、帰ればいつもそこにあつてほしい心の支えです。

今、自分たちにできることとして不安を一つ一つ減らしていく努力をしていこうにも、公的な支援はなかなか追いついていません。地方自治体の善意はあちこちから届きましたが、前政権時に超党派で議員立法された『子ども被災者支援法』は、丸1年が経った今も基本方針すら制定されていません。被害そのものに対する不安に加えて、国として真摯に取り組まれていないのでは？ という不安も大きいです。

健康面の対策にだけ限ってみても、食品や環境の放射能測定、健康診断、避難保養の手だて等々、やむにやまれず動いた市民や生産者個人のもとに届いたのは、多くが民間からの草の根支援や市民団体や宗教団体からの支援だったと聞いています。

さらに、自分たちが受けている被害が小さく限定されたものにされようとしているのではないか、こんなことで事故はどこかでまた再発して誰かに苦しみが続くのではないかと、という不安もあります。

事故後に国民が選挙で選んだ政府の政調会長が「悲惨な爆発事故を起こした福島事故を含めて死亡者が出ている状況にもない、最大限の安全を確保しながら、（原発を）活用するしかない。原発は廃炉まで考えないと莫大なお金がかかるが稼働している間のコストは安い」と発言したことにも被災者のショックと反発が広がっています。

そして何より、事故が収束していないことへの不安は大きいです。

先般の事故現場冷却装置のネズミ停電では、黙して日常生活を営んでいる多くの人々がガソリンスタンドに向かい、静かにガソリンを満タンにして眠りについたのでした。頻発に続く地震も不安です。福島気象台のデータによると3・11以前の2年間には県内で4回だった震度4以上の地震は、3・11以降の2年で144回に達し更新を続けています。

事故処理の見通しや、累積する作業員の方々の被曝もとても心配です。

それから、除染による新たな公衆被曝や環境汚染も心配です。

除染事業の推進主体の元締めは環境省であり、原子力研究開発に携わってきた機関が参画していますが、除染現場は、放射性物質を取り扱う専門知識も技術も経験もない市町村です。町内会のおじさんたちを含め、地元の人々

が普段の服装とさして変わらない身支度で高圧洗浄機の水しぶきを浴びているのを幾度も目にしました。各家でも自主的除染作業が行われてきました。状況によつては行政の施策を1年も2年も待つてはいられません。

各種の除染で削られた表土や集められた落ち葉刈り枝等々は、線量によっては搬入受け入れ先もないので、とりあえずフレコンバッグという厚手のビニール袋に詰められて、個人宅の敷地や沿道に累々と並べられています。増える一方です。子どもも暮らす生活圏内の中です。今まで緑と土しか感じなかった田舎の慕わしい質感の中でそれらは異様で異質で、まさに無言のうちに何かを強く突きつけてきます。

まだあります。自分の生活圏に在る汚染物を集めて自分の生活圏内にそつと保管することを強いられているばかりか、今、福島県鮫川村では、1キロ8000ベクレル以上の高濃度汚染物

の焼却減容化焼却灰のモデル事業がひそやかにすみやかに進められ、国（環境省）主体で着工されています。焼却灰は一般廃棄物処分場に埋立てる計画だそうです。現地は人口こそ少ないけれど、他市町村の水源地であり、稀少な生物の生息地です。県内ではとりわけ汚染が少ないエリアで、先月「鮫川村焼却炉問題連絡会」の方を個人的にお訪ねした折には、村では県内の子どもらの保養受け入れの企画もあると伺いました。

国は、このモデル事業でデータと実績を得たら福島県内30箇所焼却処分を進める計画だそうです。いつか早晚、全国に適用されていくのでしょうか。処分場予定地がマージングされた県地図を見た瞬間には、今以上に大気や土壌、水の汚染が拡大されるのではないかと暗澹たる気持ちになるのを禁じ得ませんでした。そんな不安に何とか折り合いを付けられるかどうかは、必要性の

論議や安全対策に際して、民主的なスタンスと手立てが望めるかどうかにかかっているのだと思いますが、なかなか難しい現状だそうです。

ご支援の御礼からだいぶんそれてしまつて不安報告になつてしまいました。でも不安は、安心への願いと背中合わせです。

今、被災地であるのか、明日の被災地であるのかに関わらず、今、それぞれの立場と意見を違えているにしても、

みんなの家と心に平安を求め、
母なる大地に陳謝しつつ、
子どもらの笑顔のために、
今を支え合いたいです。

ご支援ありがとうございます。皆様どうぞお元気で過ごしてください。

南相馬訪問報告

水瀬友豪（Teamめとば）



南相馬で取材する松商放送部

先日、松商学園高等学校放送部からTeamめとばに出前授業の依頼がありました。

ゴールデンウィークに松商放送部が福島県南相馬の原町高校に取材に行くので、福島へ行く生徒たち10人を対象に放射能の基礎知識の講座をお願いしたいということでした。

5月18日のTeamめとば森田君の出前授業に僕も同行したのがきっかけで、松商放送部と一緒に福島を訪問することになりました。

Teamめとばが設立して1年が経ち、食品放射能測定だけでなく出前授業や学校給食の食材測定を行うようになりました。しかし、なぜ食品を測定するのかという根本の原因を作ったモノを自分自身の目でまだ見たことがありませんでした。それでは、出前授業を行う意味や出前授業に対する思いが果たして伝わるのかという疑問がありました。この疑問を無くすために、

また自分自身の中でTeamめとばで活動する意味を確認するためにも現地を訪問したいと思ったのです。

5月2日夜、バスで出発、5月3～5日までの訪問で一番印象的だったのは、小高地区の海岸沿いのある田んぼの真ん中に消防車が1台拉げた状態で取り残されていた光景です。そこは警戒区域から避難準備区域になって日が



田んぼのなかに取り残された消防車

経っていないので、瓦礫処理が進んでいませんでした。その消防車は震災の時に何をしていたのかと考えると胸が苦しくなりました。また、高汚染地ということで、松商の生徒を残して、先生と僕らだけで飯館村の空間線量率が高い場所へ向かった時、奥に進もうとする車を引き返すように促している警備員がいたことに本当に驚きました。その場所の空間線量率は最大で11マイクロシーベルト/時でした。警備員の人達はそこですーっと警備をしているのです。

福島に行ってみて、出前授業は長野県だけでなく福島県のような空間線量率の高い地域に住んでいる子どもたちに対して行う必要があると感じました。今回福島で訪れた場所全部の空間線量率を測定しました。やはり松本市内の数倍、数百倍の空間線量率があります。それなのに福島の人々は何食わ

ぬ顔で住んでいるのです。正直何が正しいのか分からなくなりました。

現在、人体に影響が出ていないかもしれませんが、5年後10年後に同じ結果が出るかは誰も分かりません。人体に影響するかどうかは確率の話だからです。そのような環境で子どもたちは生きています。私達は、子どもたちに今住んでいる場所の線量について教える必要があります、それについて考える力の手助けをする必要があると感じました。子どもたちに何の罪もありませんが、福島県で生きて行く以上生活環境について知る必要があります。

震災から2年が経ち、テレビでは復興という言葉を使いますが、実際何にも始まっていない場所を松商放送部の生徒達と一緒に見ました。放送部員一人ひとり感じるものが違うけれど、高校生たち自身の目で現状を見て、それを伝えようとする姿をみて、本当に心強かったです。次世代を担う人間とこ

れから向き合っていかなければいけない課題について共有出来たことが互いの刺激になったと思います。

JCFの活動を通じてつながっている南相馬の方達に歓待して頂き、南相馬の人々の笑顔を見ることができてとても良かったです。放射能汚染だけでなく、地震や津波による被害で肉親や家を無くした人、家や人が流される光景を見ていた人が、互いに励まし合って笑顔で生きていました。人のつながりの強さをその姿から感じました。でもだからこそ、自分たちが住んでいる場所の現状と今後について理解を深めて欲しいと思いました。

松商の生徒と一緒に現地を訪問して、あまりにも多くのことを感じ考え、まだ十分に言葉にすることができません。機会があったら皆さんにも是非現地に行って、自分の目や耳で感じて欲しいと思いました。

Teamめとば

1年間の活動を振り返って

浜崎竜太郎



松本市立本郷小学校児童にJCFの活動について話す浜崎さん（左）

福島第一原発事故後、2年が過ぎた今、私達JCF—Teamめとばの歩みがどういふものだったか？ どのような活動成果を果たし、どのような反省点があるかを振り返ってみました。

設立経緯

福島第一原発事故に伴う「内部被曝の被害から子どもたちを守る」という目的で2012年2月にJCFが市民放射能測定所を開所（JCF—Teamめとば結成）しました。

Teamめとばの「生みの親」と言っても過言ではない、信州大学名誉教授・三輪浩先生がJCFからの提案に基づき、既に導入してあった食品放射能測定機の操作を信州大学の学生に依頼し、私を含め7人（当時、学部4年）の有志が集まりました。私達は東日本大震災また福島第一原発事故後、社会に対して何か「貢献的な」活動をした

いという強い思いと、理学部・物理専攻という背景が相乗的に結びつき、三輪先生からの依頼をお受けしました。

設立当初

まず、各自、食品放射能測定機の操作方法を覚えしました。それまで私達は放射能測定に対する知識はほとんどありませんでしたが、この測定手順は意外に簡単で問題なくクリアしました。

実際の測定は主に3つのステップで行う事ができます。

- ①V11という円柱形の測定容器に試料を詰め、測定機に測定容器を入れる。
- ②測定ソフトを立ち上げ重量など必要項目を入力し開始ボタンを押す。その後、数時間程度、測定機を動作させる。
- ③測定結果を印刷する。

測定に関して慣れた後、測定結果（エネルギースペクトル図の読み方）などを理解するため、放射能測定機の動作

原理や放射能測定 of 原理を勉強しました。

また私は、JCF スタッフの横内さんや三輪先生と共に既に開所している幾つか（長野県、福島県、愛知県）の測定所を見学に行きました。各測定所のオペレーターから測定スキル向上のためのレクチャーを受けたり、依頼測定のシステムや測定機種の違いについて学びました。特に3・11後に設立されたそれぞれの測定所の方々の開所理由などのお話はとても印象的でした。

訪問後、得た知識を活用して、測定環境を整える作業、測定依頼書のフォーマット改良、測定マニュアル、測定注意事項の作成などをしました。

マスメディアからの取材

少しずつTeamめとばの測定環境が整って来た頃、3・11から1年という事もあり幾つかのマスメディアの

方々から取材をいただきました。僕は、JCFの鎌田理事長や神谷事務局長とは違い、取材など初めての経験で不慣れで緊張しました。けれども私たちの活動をより多くの方に知って頂き、放射能に関する理解と関心に繋がっていかばと思う、出来るだけ応じるよう心がけています。

2012年3月、Teamめとば7人全員が学部を卒業し、大学院に進学しました。卒業式の後、事務局に挨拶に行ったのですが、JCFスタッフ一同がサプライズで僕らをシャンパンで祝福してくれました。

日報システム

2012年5月以降、それまで事務局とTeamめとばの連絡はemailやGoogleの共有ドキュメントを使っていたましたが、なかなか十分な機能を発揮せずにいました。そこで佐藤君が

『サイボウズ』と呼ばれるメンバー限定のタスク管理サイトを導入、日々の活動や連絡、問題の提起など、より緊密なコミュニケーションが出来るようになりました。これはめとばにとって重要な進展だったと思います。

このサイボウズの具体的な活用方法です。TeamめとばはJCF事務局の勤務日に常時1人以上がシフト制で測定業務を担当し、終了時サイボウズにその日の業務や出来事、引き継ぎなどを日報で報告します。

私たちの活動も多様化する中、サイボウズの連絡機能はもちろんファイル共有やカレンダー機能は必須になっています。また、このサイボウズの掲示板にはトピックスやコメントに対して「いいねー」という機能があるのもモチベーションアップに繋がります。

2013年6月現在のサイボウズの日報では様々な意見交換が随時行われていて、Teamめとば内で良い連携が

とれていると私なりに満足しています。

実は最近までは、日報などが簡略過ぎて、シフト当番のメンバーが測定業務をきちんと行なっても、それをアウトプットしないとなかなかチームワーク力（組織力）が発揮できていないところがありました。しかし現在はTeam内で頻繁にサイボウズによる意見交換が行われるようになりました。

また、最近佐藤君が日課表（シフト当番の1日の仕事のルーチン表）を作成した事により、1日で行うべきタスクが明確になり、作業ミスを防ぐ事に繋がりました。

ホームページ作成

2012年7月、Teamめとばのホームページを公開しました。佐藤君と私为中心となり、Teamの紹介や活動報告、測定結果の公開をホームページ上で行う事を目的に作成しまし

た。完成までに少し時間がかかりましたが、活動紹介や測定結果のアーカイブの公開に加え放射能に関する参考資料や用語集をなんとか付け加える事ができました。

しかし、ホームページ完成後の更新頻度が少ないのが現状の課題で、Team内で自主的に有益な情報を随時更新出来るようになる事を次の目標としています。

もちろん、ホームページで外部に公開する以上、正確な知識や文章力が必要です。これは先程の日報システムを使いカバーできると思います。

ホームページとは別にTwitterやFacebookというインターネット上のソーシャルネットワーキングサービス（日記機能がある）にTeamめとばアカウントを作成し、測定結果の一部を公開しています。Twitterを始めた当初、フォロワー（読者）が少なく心配していたのですが、口コミ効果なども

あり、今ではフォロワーが130人以上登録されていて、影響力のある媒体となりました。

またFacebookで測定所間の外部とは閉じたグループを作りました。県内の測定所の方々と、また全国の測定所の方々と即座に連絡がとれる重要なツールとして利用しています。

出前授業プロジェクト

出前授業プロジェクトは小中高の学校や市民の方々からの依頼により、出向いて放射能に関する知識・考え方を発表して、参加者と話し合うというプロジェクトで、川島君と森田君がとりまとめています。以前グランドゼロでも報告したように、2012年5月31日、飯田高校での280人もの高校生の前で講座からスタートしました。現在まで小さな相談会などを含めて10回以上、出前授業を行う事ができ、講座

を行うことが、私たち自身の放射能に関する勉強の良い機会ともなっています。特にエクセラン高校では放射能に関する文献を調べる試みがあり、定期的にTeamめとばも携わらせて頂いています。

また信州大学理学部主催の、2012年「自然をさぐる」という科学の面白さを伝える公開プロジェクトにも参加し、2013年も参加予定です。

放射能に関して伝えるためには、やはりまだまだ勉強が必要なので、放射能に関する講演会、例えば、早野龍五氏、矢ヶ崎克馬氏や小出裕章氏の講演会に参加し積極的に情報収集をしています。

今後も出前授業の依頼があれば、依頼先と事前の打ち合わせをしつかりして、依頼先の期待に応える講座を組み立てられるようにしていきたいと思っています。

給食プロジェクト

Teamめとばでは高橋（栄也）君、丹羽（博康）君が担当しています。笑顔の給食プロジェクトは学校給食課、東部給食センターなどの関係各機関から許可を頂き、学校給食に使われる食材の一部を週に3試料以上、測定するというものです。基本的には給食が生徒に提供される前に食材の放射能濃度を測定する事前測定を行なっています。しかし、当日に納入される食材や保存食など、事前測定だけでは対応出来ない試料もあり、現在、その対応を検討しています。測定結果は随時、ホームページとTwitterにより公開して保護者や関心が高い方々に提供しています。もちろん測定後、放射能濃度が検出された場合、学校給食課、給食センターに連絡して対応をしていた、たくさんになっていきます。

現在まで100検体以上を測定しましたが、全て不検出でした。また測定

には一般的に長時間測定の方が放射能の有無を判定できる精度が上がるのですが、厚生労働省の基準値を元に「食品中の放射性セシウムスクリーニング法」という、測定方法に関する注意書きを参考にすると、食材の100ベクレル/kg（基準値）という放射能の有無を検出する場合、25ベクレル/kg以下の検出限界が必要とあります。これは、セシウム137とセシウム134の検出限界の合計が25ベクレル/kg以下でないとい00ベクレル/kgの濃度があるかないかを正確には判断できないと言うことです。ですから私たちはセシウム合計検出限界を25ベクレル/kg以下にし、かつセシウム合計検出限界をできるだけ10ベクレル/kg以下を目指すようにしております。

Twitterで保護者の方から「最近、検出限界が低く抑えられているね」とフィードバック頂いた事もあります。昨年度に引き継ぎ今年度も給食セン

◆給食測定の流れ

毎月末に翌月の給食の食材リストを頂く



週に3検体を選別

放射能濃度測定

給食センターに報告、ウェブ、Twitterでの公開

ターの方々と連携して測定を続けます。今まで以上に栄養士の方々と保護者からご意見を聞き、測定結果を食材の選別に活かせるようにしたいと思います。

食品等の測定依頼

現在、Teamめとばでは、食材を中心に土壌や焼却灰などの放射能濃度の依頼を受けています。食材は原則的に依頼者の方に持ち込んで頂いて、測定後の返却は不可としています（食材が高価な試料の場合等は、相談可）。

土壌に関しては高放射能濃度である可能性を考慮して、依頼者本人と私たちオペレーターの被曝にも留意して、試料の測定前にシンチレーション式検出器で簡易測定しています。また土壌は基本的には1週間以内に返却扱いとなります。このように、土壌測定に関してはいくつかの留意点があるので、採取方法なども含めてのマニュアルを倉田君が作成しました。依頼者の方にも説明しやすくJCF事務局スタッフやTeamめとばにとつてもありがたいマニュアルだと思います。

現在、学校給食測定などを含めて約

670検体の試料を測定しましたが、基準値（100ベクレル/kg）を超える食材はありませんでした。また土壌に関しては福島県採取で50000ベクレル/kg程度の検体がありました。

実は土壌汚染を表す場合、よく使用される単位として、ベクレル/平方メートルと私たちの測定結果で表示されるベクレル/kgの2つがあります。このベクレル/kgのおよそ50〜65倍（採取深度による）程度がベクレル/平方メートルと言われています。そこでこの50000ベクレル/kgの土壌はおよそ300000ベクレル/平方メートルとなります。この結果は文部科学省の放射線量等分布マップ拡大サイト（汚染マップ）の結果とも、ある程度対応していると思います。

また注意が必要な試料について横浜市民測定所の方々がまとめて表にしましたものが左ページの図です。

＊検査対象自治体の 17 都県産品 気をつけたい食品（平成 25 年度版）

＊平成 24 年度に基準値超過検出あり（平成 24 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日検査結果）				＊継続検取	＊子供が好む摂取量め配慮		
＊生産年度に気を付ける					＊馬肉、野生/鹿、鴨、猪、熊に基準値超過の報告あり		
 きのこ類 (天然は物に注意)	 山菜 (タラの芽、フキ、ユギョミ等)	 たけのこ	 かんきつ類	 うめ/梅干し	 ブルーベリー	 くり	
 米(胚芽米/玄米)	 そば	 大豆	 小豆	 れんこん	 クワイ	 小松菜	
 ほうれん草	 あしたば	 牛肉	 豚肉	 水産物(海水) (クロダイ、カレイ、アイナメ、スズキ、フグ、ヒラメ、タラ等)	 水産物(淡水) (イワナ、アユ、ウカサギ等)		
 さつまいも	 じゃがいも	 キャベツ	 牛乳	 いちじく	 煮干し/削り節	 小麦粉/全粒粉	
 かぼちゃ	 さといも	 ぎんなん	 お茶	 キウイ	 さくらんぼ	 もも	
 かぶ/にんじん	マダラ、アイナメ、コヒメカスベ、イカダコ、アカ エイ、カレイ、クロダイ、フグ、ニギ、ホウボウ、キ ンメダイ、スナフグ、ダラ、ボラ、マゴチ、アハ、 マアジ、カンサ、 水産物(海水)		 麦茶	 かき	 はちみつ	 なし/ラフランス	

農林水産省：品目別の検査結果/農産物の検査結果の概要（平成 24 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日検査結果）http://www.maff.go.jp/j/kanbo/joho/saigai/s_chosa/index.html
 水産庁：水産物の放射性物質調査の結果について <http://www.jfa.maff.go.jp/j/housyanou/kekka.html>（※リンク切れの場合は、表記にて検索ください。）
 ※各自自治体のサンプリング検査の結果で検出例のある品目をまとめました。詳細は、上記リンクをご覧ください。このイラストにある食品が必ず汚染されているという意味ではありません。
 ＊横浜市民測定所測定員ブログ：<http://yermis.blog.fc2.com/> 「気をつけたい食品（平成 25 年度版）」も合わせてご覧ください。

1

測定所間連絡会

全国市民放射能測定所ネットワークは全国の約百カ所の測定所からなる連携グループで、Facebook を使って活発に情報交換、また意見交換をしています。現在、全国市民放射能ネットワーク内の有志の測定所共同で各測定所の測定結果を同一ホームページサイトに公開するプロジェクトを進行しています。

次に高木仁三郎市民科学基金を中心に約 20 カ所の測定所からなる連携グループが、年に数回集まり各測定所の活動報告をしています。三輪先生、JCF 中澤さん、Team めとば（丹羽音葉君、森田君、浜崎）がこの連絡会に参加しました。

長野県放射能測定所連絡会は県内 7 カ所の測定所からなる連携グループで、活動内容は定期的に集まり、情報交換や意見交換を目的にしています。

Facebookを利用して随時、県内外の注意すべき食材、又は測定値、測定方法などの意見交換をしています。以前の記事にもあったように、長野県の幾つかの測定所は民間企業として専門的な知識を持って測定所運営されている方々なので、疑問点などあったら、まずこのグループ内で解決を試みます。以下のような輪番制で約2カ月に1度を目安にミーティングをしていて、2012年6月から今までに5回のミーティングが開催されました。

第4・第5回 長野連絡会

第4回の連絡会はTeamめとば主催で行われ、JCF事務所で2013年2月2日に、開催しました。

NHKの取材を受けた事、初めて軽井沢測定所の方がスカイプ（インターネット電話）で会議に参加された事がトピックスでした。主だった議題はい

つもとおり現状報告でしたが、各測定所で放射能汚染に関してどのような取り組みをなされているのか？ また依頼件数はどのような状況か？ などが話題でした。

今回は各測定所の取り組みの紹介は控えますが、依頼件数に関しては塩尻市にあるアイメジャー信州放射能ラボ以外の測定所では減少傾向がみられるそうです。実際、Teamめとばでも依頼件数は2013年に入り以前のおよそ3分の1程度に減少しました。放射能に関しての関心が低くなつてしまったのではないかと、危惧しています。

また、この第4回の連絡会がきっかけでアイメジャー信州放射能ラボの測定室を見学する事となりました。左ページに示すように3・11以前の国土はどの程度、放射性セシウムがあったかなど有益な情報を得ました。

第5回目の連絡会は、2013年5

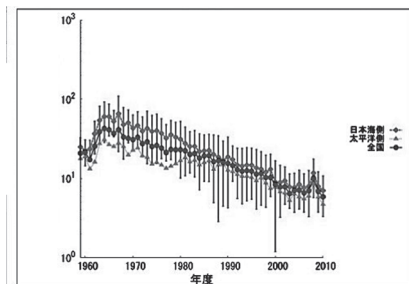
月24日に長野市の柳原公民館で、長野市民測定所主催で行われました。今回初めて県内7カ所の全測定所のメンバーが集まりました。

長野県環境部環境政策課の方を招いての意見交換会がメインでした。事前に環境政策課に提出した質問を、県職員の方から1つ1つ丁寧に回答を頂くというスタイルで進行了ました。

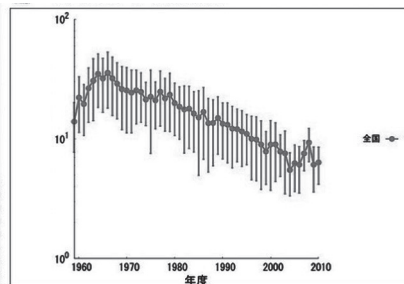
質問内容は計30と多岐（学校給食や除染、空間線量など）にわたるので、ここでは省略させて頂きますが、私個人として印象的だった事は、東信地方の汚染状況が想像以上にあり、認識の変更を強いられた事と、環境政策課の方々の立場を考慮した誠意ある対応でした。専門家ではない県職員の方々ですが、行政という立場上、実務的な法律や行政の取り組みなどの正確な理解、また私たちの質問に対する返答の雄弁さは正直、圧巻でした。今後とも長野県放射能測定所連絡会と環境政策課の

主要穀類及び農耕土壌の全国平均におけるセシウム 137 の分析データ

水田作土中の全セシウム 137 濃度 (Bq/kg)



畑作土中の全セシウム 137 濃度 (Bq/kg)



方との連携は必須であると感じました。

まず、最初の意見交換会（顔合わせ）は無事に終了しましたので、今後は定期的に行政の方にも参加して頂いて意見交換を重ねることにより、補完的なパートナーシップを築けるかがポイントになってくると思います。

測定室の環境整備

開所時とは見違える程測定環境が整った測定室となっているので、改めて報告します。

まず、測定室を汚染から保護する目的で測定室の床にフローリングとブルーシートを敷きました。また、検体の選別用に棚を設置して試料の保管をしています。特に1階に専用の土壌管理スペースを用意して試料である土壌の保管をしています。さらに冷蔵庫を設置し、食材の保管に利用していま

す。以前の記事にもありましたが、断熱材を使用した簡易的な恒温槽を作製し温度に敏感な測定機の性能を向上させました。測定容器に関しては当初V11容器を使用していました。現在ではV11から更新して旧型マリネリ容器、さらに新型マリネリ容器に変更したことにより、検出限界を低減させた事が確認出来ました。

メンバーの増員

以上のように、Teamめとばの活動は依頼測定に留まらず、設立当初からの「内部被曝の被害から子どもたちを守る」という目的意識を重視し、出前授業プロジェクトや給食プロジェクト、自主測定プロジェクトにまで活動範囲を拡充しました。改めて感じる事は、ここまで様々な取り組みに携われた事は、JCFからのフォローアップ、三輪先生の適切な指導、他の測定

所からの有益なアドバイス、そしてTeamの各個人のマンパワーと全体としてのチームワーク力のおかげであったと思います。何より放射能測定に關して学生が積極的に活動している事が他の測定所とは明確に異なるコアコンピタンス（核となる能力・得意分野）だと思っています。

Teamめとばのメンバーは開所時の7名から増減して、現在12名となりました。新メンバーを迎える上で、ただ知識や技術の引き継ぎをする事だけに留まらず、これまでの活動の趣旨と経緯を整理して分かりやすく伝え、今まで以上に主体的な活動に取り組めるような環境を作る事も旧メンバーとしては必要だと感じます。

また、依頼測定が減少してきたこの時期をターニングポイントと認識し、今後、Teamめとばが自主的に行う測定や新たな活動も考慮に入れ、頑張っ

最後に信州大学の同窓会連合会からTeamめとばの課外活動の功績を評価され、2013年4月、表彰された。事も私たちにとって、嬉しい報告でした。



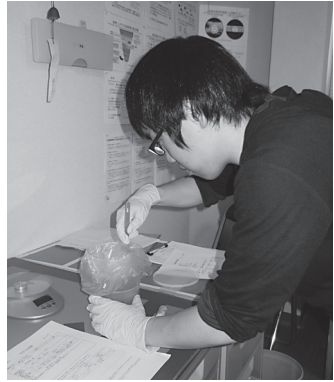
同窓会連合会から表彰を受ける Teamめとば

☆新メンバー紹介

岡崎友哉（磁性実験研究室4年）

3・11以降、放射能汚染に対する関心は増しており、自分もその1人です。スーパード売っている農産物や魚介類には無農薬と書いてあっても放射能汚染がないと書いてあるものはとても少ない気がします。体内被曝の心配もあるのにそれを気にせず無農薬などの文句で安心して買っているのが現状ではないかと思っています。

5月からTeamめとばで活動をする事になりました。今年の2月に大学の放射線管理実習に参加して目に見えない放射線を扱う実験の方法を学び、放射性物質の扱い方や危険さを知ることができました。普段の大学生活では放射線管理を経験する機会がなく、この実習は自分にとって大変有意義な経験でした。



検体をマリネリ容器に詰める岡崎さん

先輩からTeamめとばの活動に関して食品や土壌の放射能測定を行なっていることを知りました。この話を聞いて、実習での経験が役に立つのではないかと思いました。食品や土壌など色々なものの放射能測定によって安全性を確認したり、Teamめとばでの活動で放射能に関する知識をさらに得て、それをいろいろな人と共有して放射能や汚染に関する問題について考える機会が増えればと思っています。

高橋一馬（宇宙線研究室4年）

自分の出身は福島県の須賀川市で、震災の際には自分は長野にいたので直接その被害を目にすることはなかったのですが、そのしばらく後に家族や友達に話を聞くとやはり震災の後しばらくはライフラインが途切れ、皆それぞれが普段では特段考える事もない「生き残る」という一心で生活していたそうです。

現在ではその様な物理的な被害は内陸地ではある程度復旧し、表面上では普段の生活を取り戻しつつある部分もあります。しかし、目に見えない被害、「放射線」というものは2年以上たった現在でさえも解決にはほど遠い状況であり、日々その影響を及ぼし続けています。実家に帰ると、一見普段通りになったように見える中で、公園に行くと周辺地域の放射線量が高い表土を削り取り集めたものの山ができており、

その周りで子ども達が遊んでいるという異様な光景が広がっていました。

このような状況を見てきて、今回Teamめとばの活動を聞き、すぐに自分も活動に参加させてもらいたいと思いました。今まで詳しくは知らずただ恐れて、または、よく知らないから这段时间がたつにつれ、その危機感も薄らいでしまっていたかもしれない物について、ここでもう一度考え直すよい機会になるだろうと思ったからです。

これから、ここでの活動を通して放射能についての知識を深め、それを周りの人々に伝え、何か人のために自分の知識を活用できたらと考えています。



高橋一馬さん

607	たけのこ	岐阜県	4月22日	716	7200	ND<6.11	ND<6.92
608	ゼンマイ	国産	4月23日	987	18000	ND<2.83	ND<3.16
610	豚肉	長崎県	4月24日	1040	18000	ND<2.78	ND<3.12
611	小かぶ	千葉県	4月26日	721	9000	ND<5.43	ND<6.12
612	きぬさや	国産	4月30日	878	18000	ND<3.10	ND<3.49
613	牛乳	不明	5月02日	1002	68400	ND<1.43	ND<1.61
614	いかなご	福島県相馬市	5月03日	550	75600	1.99±0.84	ND<2.78
615	土壌	長野県小諸市	5月07日	1093	3600	7.99±2.89	ND<8.76
616	土壌	長野県小諸市	5月08日	528	3600	39.65±9.17	19.27±8.76
621	アスパラガス	熊本県	5月07日	744	18000	ND<3.68	ND<4.14
622	キャベツ	愛知県	5月08日	705	18000	ND<3.90	ND<4.38
623	プロッコリー	北海道	5月09日	648	18000	ND<4.12	ND<4.67

ND とは検出限界値未満のことで、ND<の右の数字が検出限界値です。検出限界とは有為な放射能を検出することのできる下限値で、有為な放射能とは、統計的に見て、バックグラウンド値と明らかに異なる放射能が検出されたと判断できるということです（単位：Bq/kg）。放射能濃度と検出限界には誤差（±の右の数字）があります。*同じNo.のデータが重複しているものは、検査時間などを変えて再検査したデータです。

食品衛生法上の基準値（厚生労働省 医薬食品局食品安全部 平成 24 年 4 月 1 日施行）

放射性セシウム	飲料水	10 Bq/kg
	牛乳	50 Bq/kg
	一般食品	100 Bq/kg
	乳児用食品	50 Bq/kg

JCF-Team めとば食品等放射能測定結果（測定結果公表可のデータのみ）

2013 年 3 月～2013 年 5 月

検体番号	試料名	産地	分析日	重量 (g)	測定時間 (s)	セシウム 137(Bq/kg)	セシウム 134(Bq/kg)
579	土壌	長野県松本市	3 月 26 日	793	9000	ND<5.83	ND<6.70
580	竹酢液	不明	3 月 26 日	947	10800	ND<3.80	ND<4.25
585	土壌	千葉県白井市	4 月 11 日	950	54000	474.96±85.63	265.50±47.97
586	土壌	長野県	4 月 03 日	543	54000	2.42±1.01	ND<3.39
587	米ぬか	長野県	4 月 04 日	808	54000	ND<2.13	ND<2.42
589	茶	長野県	4 月 03 日	763	13800	ND<2.33	ND<4.71
590	卵殻	長野県松本市	4 月 05 日	167	54000	ND<12.87	ND<14.60
591	灰	長野県伊那市	4 月 05 日	337	21600	31.11±6.72	11.35±8.45
592	牛乳	不明	4 月 08 日	1012	21600	ND<2.56	ND<2.85
593	鶏肉	長野県	4 月 09 日	990	18000	ND<2.89	ND<3.26
594	きゅうり	宮崎県	4 月 10 日	970	18000	ND<2.92	ND<3.27
595	土壌	長野県長野市	4 月 12 日	1265	7200	50.67±9.58	29.05±6.63
596	土壌	長野県長野市	4 月 12 日	1205	7200	30.39±5.96	16.72±3.70
597	土壌	群馬県前橋市	4 月 15 日	919	3600	122.57±23.07	69.55±13.60
598	よもぎ	長野県松本市	4 月 16 日	497	54000	ND<3.14	ND<3.54
599	土壌	群馬県前橋市	4 月 16 日	869	12600	132.97±24.23	73.41±13.56
600	土壌	群馬県前橋市	4 月 17 日	856	3600	268.50±49.28	146.16±28.36
601	土壌	群馬県前橋市	4 月 17 日	832	3600	203.84±37.63	109.33±21.96
602	たけのこ	国産	4 月 18 日	1131	7200	ND<3.99	ND<4.50
603	落ち葉	群馬県前橋市	4 月 19 日	123	3600	198.33±43.01	101.28±39.46
604	こんにゃく	国産	4 月 19 日	1026	18000	ND<2.74	ND<3.07
606	しいたけ	長野県北安曇郡	4 月 25 日	635	21600	ND<3.88	ND<4.36

2013年度 JCF通常総会



JCF 通常総会で活動報告をする Team めとば

2013年度 通常総会

開催日 2013年6月1日（土）

会場 松本市中央公民館

正会員総数 96名

出席・委任状提出会員 59名

・鎌田理事長挨拶

福島支援に関しては、福島県健康管理調査の結果報告に、母親たちが不安を抱えている。福島県は東京電力福島第一原発事故の発生当時に18歳以下だった子ども約17万4千人分の甲状腺検査の結果を発表した。これによると甲状腺がんの患者は累計12人になった。事故との因果関係については現段階では難しいが、この結果については、専門家に意見を聞きながら、お母さん達の不安に応えるきめ細かい検診を早く軌道に乗せていくように働きかけていきたい。

イラク支援について、リカ医師の遺伝子研究の成果が現れている。リカ医師は今年の3月に帰国されたが、今後とも来日して数カ月研究を行いたい意向である。

これまで、チエルノブイリに97回の医師団を送った経験を活かし、今年度も活動を続けたい。

JCFの現地ネットワークを活かし参加者にチエルノブイリを伝えるスタディツアーを実施することも意味のある事である。

第1号議案 2012年度事業報告

- ①チエルノブイリ医療報告
- ・ベトカプロジェクト

以下の医療資材を供与した。

内視鏡・電源コード・対極板コネクタ―

・ゴメリプロジェクト

以下の医薬品を供与した。

生化学分析器試薬（ゴメリ州

立病院付属産院）

・スタディツアー

2012年5月19～25日実施

・97次訪問団

訪問日時 3月20～24日

目的

ベラルーシにおける放射線の子

どもたちへのリスク調査

健診と内部被曝測定システム

化について聞き取り

医薬品供与

②イラク小児白血病・小児がん支援

・リカ医師の白血病発症研究への協力

イラク小児リンパ性白血病の特性に

ついての論文がまとまった。

急性骨髄性白血病における遺伝子解

析により、約3割の患者の予後が良い

事がわかりイラクの医師や患者家族に

希望を与えた。

③福島第一原発事故被災者支援

福島を中心に妊産婦、乳幼児、成長

期の子どもを被曝から守る取り組みを

行った。

・健康診断の経過について

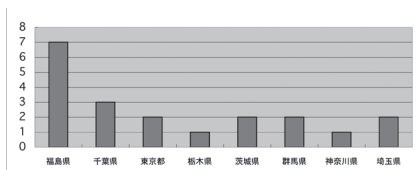
信州大学医学部小児科で毎週月曜日

各4名の検診支援。

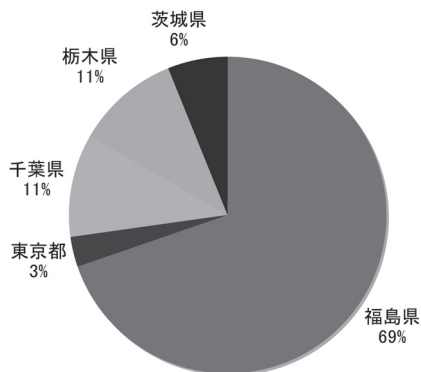
9月より諏訪中央病院にてエコー検

査支援。

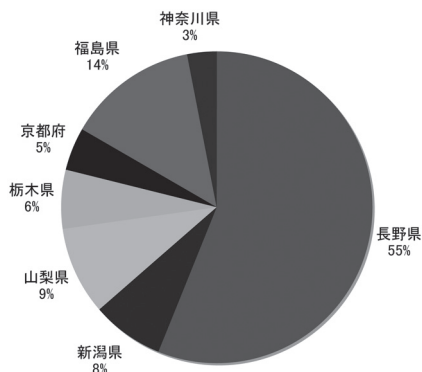
諏訪中央病院エコー受診者の震災直後居住内訳



信州大学医学部小児科受診者居住地



震災直後の居住地



検診時の居住地

・ガイガーカウンター貸出状況

●二本松

同朋幼稚園

●南相馬

南相馬ふるさと回帰支援センター
(道の駅で被災地見学者に貸出)

きつずサポートかのみん

南相馬除染研究所

●郡山市

3a郡山

●仙台

わかめの会

・学校給食・食品・土壌放射能測定 (Teamめとば)

測定の給食食材が偏ってしまうことが課題である。

今年度は当日測定も取り入れていく。

保護者から、希望でだしや海産物測定の要望が多いので実現していく。

出前授業はJCFの意向も考慮して

めとばと協力して行なっていく。

長時間測定、事前測定を引き続き行っていく。

全体的には測定数が減っている。放射能の移行などを考えると、測定の継続の必要性を感じる。

検出の値が高かった場合は三輪浩先生の助言も頂いて、科学的な目とチームとしての経験から、測定依頼者にアドバイスをしている。

●鎌田理事長より

低線量被曝でがんが増えていると見るドクターもいる。しかし福島に帰らざるを得ない人もいる現実のなかで、低線量被曝の基準内で判断するしかない場合もある。最終的判断は依頼者の判断に依るので、「絶対大丈夫」「絶対ダメ!」とはいえない。

Teamめとば測定数の推移

測定検体数2012年4月～2013年3月31日

月	食品	水	その他	給食	土壌・落ち葉・灰	EM土壌	合計
4月	18	1	5	0	18	13	55
5月	24	1	4	0	12	28	69
6月	5	0	0	0	2	14	21
7月	5	0	1	6	1	17	30
8月	13	0	1	6	2	2	24
9月	16	1	2	11	1	9	40
10月	40	0	1	13	2	15	71
11月	21	9	0	14	12	16	72
12月	12	0	0	12	1	0	25
1月	9	1	0	11	5	0	26
2月	6	0	0	12	1	0	19
3月	10	0	3	7	3	0	23
合計	179	13	17	92	60	114	475

④ JCF 講座・セミナー

・2012年4月26日メモリアルデー

(於 松本市中央公民館)

福島佐藤健太さんと高村美晴さん
によるチエルノブイリ訪問と福島報告
コカリナ奏者「森のオカリナ樹音」
カンナさん、桃さんの演奏

⑤ 国内事業報告

- ・脱原発デモ参加
- ・グランドゼロ年3回発行
- ・クレジットカードによるネット募金開始。
- ・がんばらないレーベル CD「ひまわり」「おむすび」「ふるさと」、CD「ふくしま・うた語り」(6月発売)
- ・信三帆布製オリジナルバッグ
- ・ドクターかまちゃん寒天ゼリー
- ・「ふくしま・うた語り」チャリティー・トーク&コンサート

鎌田實理事長講演会&加藤登紀子

コンサート

10月8日 松本市松本キッセイ文
化会館557名参加・60人あまり
のボランティア

第2号議案 活動計算書

榎理事の協力で絆診療所にエコー検査機を導入することができた。

たくさんの方の会員の支援を受けることができた(メモリアルデーにメッセージと寄付を寄せて下さる方もある)。

残念ながら助成金は確保できなかった。
CDをたくさんの方に購入して頂いた。

・横山監事より監査報告

コンサートの大幅の赤字と、助成金が確保できなかったことが残念。
・上原税理士より

収益を支援に当てられたことは良かった。

った。運営が大変なNPOが多い中で、JCFは割に余裕ある団体ではあるが、法人であるので運転資金は持っていてほしい。それによって緊急支援も可能になる。資金的には助成金は変動的であるので、別枠として捉えていけば良いのではないかな。

・鎌田実理事長

赤字の出ない活動を目指していく。

第3号議案 2013年度事業計画

チエルノブイリとJCFの関係性も変わってきた。新しく再構築していく時期である。

① チエルノブイリ医療協力

心電図モニター2、3台ベト力地区病院から要望があった。

ゴメリ州立病院付属産院に赤ちゃん用の血液試薬を持つていく。

郡山のお母さんが9月の第1週にス

タディツアーを希望している。
医療訪問団も同時期に計画。

②イラク支援

リカ医師の研究について小池理事より報告。

坂下医師の指導で、イラクに役立
てたい一心でリカ先生が努力した
成果が出た。

日本では9割が治る白血病も、イ
ラクでは治療法が確立していない。
劣化ウラン弾との関係は遺伝子解
析からは予想した結果が出なかつ
た。

リカ医師は今年度、2カ月の日本
滞在を希望している。

(リカ医師の研究に使用するF.T.Aカード
を小池理事が総会会場で急遽手配、総会の
翌日イラクに出發する佐藤理事に託した)

③福島第一原発事故被災者支援

・信州大学小児科外来の検診は今年度

も行うことが可能である

・食品放射能測定の結果が減少した
のであれば、今年度は季節の山野草等
の自主測定をして結果を発信する取り
組みもしていきたい。

第4号議案 2013年度活動予算

・保養をJCF独自で行なう。
・仮設住宅住民支援を絆診療所との協
力によって行なう。

・『楽しく伝統食を作ってみよう！』
料理教室を継続。

・グランドゼロのバックナンバーを株
電算印刷の協力で電子書籍化する。

第5号議案 定款変更について

・住所を長野県松本市とする。
・その他の事業の記述を取る。





ドイツ・マインツの脱原発便り



マインツでは、2010年9月以降、毎月第一月曜日に「月曜日の散歩」と題した脱原発デモが実施されています

近江 まどか（マインツ友の会）

☆2022年には脱原発を実現

電力供給の16%を原子力発電が担うドイツ。1962年に原子力発電所が初めて稼働して以降、増減を繰り返して、現在は、9基が電力生産を行っています。一方で、ドイツでは原子力発電所の建設に反対する声が圧倒的に強く、新しい商用原子力発電所が最後に運転を開始したのは、1989年になります。

ドイツの脱原発運動は、1970年の半ばに始まりました。今では、ドイツを代表する市民団体となった「BUND」などの環境保護団体が活動を開始した時期と重なり、環境保護と脱原発は共に取り組む運動になったようです。1986年に起こったチェルノブイリ原発事故を機に、脱原発活動は全国規模で身近なものになりました。原子力のリスクを認識する人が増えたのです。

大きな転機が訪れたのは1998年。総選挙の結果、緑の党が連立政権入りし、緑の党が選挙公約に掲げていた「脱原発」が、社会民主党（SPD）との連立協定に組み込まれたのです。連立政権は、2000年に、ドイツ国内の原発を運営する4大電力事業者と脱原発に合意。2002年に、原子力発電所の運営期間が平均32年と設定される改正原子力法が承認され、脱原発が実現することが決まりました。

その後、2005年の総選挙で、緑の党が連立から抜け、SPDと保守政党であるキリスト教民主同盟・キリスト教社会同盟(CDU/CSU)の大連立が成立。脱原発路線は保たれたものの、2009年の総選挙により、経済界とのつながりが強いCDU/CSUと自由民主党(FDP)の連立政権が成立します。

2010年に原子力法が改正され、「つなぎの技術」として原子力発電所の運転期間の延長が決定されます。これは、原子力政策への抗議デモがドイツ各地で再燃するきっかけとなります。そこで起こった東電原発事故。原発に反対する世論が圧巻するなかで、脱原発の前倒しを決意したドイツ政府の動きは、日本でも大きく報道されたことと思います。

ドイツは、これで、2022年には全原子力発電所が運転を停止し、脱原発が達成されることとなります。しかし、市民は、この決定の実現には懐疑的です。政権を担う政党の考え方により、エネルギー政策は二転三転してきたためです。市民たちは、一刻も早い脱原発を望み、そしてドイツ基本法(憲法)に脱原発を恒久的に実現することを記すことを目指しており、デモやロビーイング活動は休むことなく行っています。

☆再生可能エネルギーが主役の時代に

ドイツの電力需要における再生可能エネルギーの割合は、1990年の時点で3.4%、2000年では6.3%でしたが、以降順調に伸びており、2008年では14.8%、そして2012年には22.9%に達しました。

ドイツは、日照時間が短く、また、風が期待できる海岸沿いも北部のみと、決して再生可能エネルギー源に富んだ地域ではありません。そのため、ドイツ政府は、再生可能エネルギーへの投資を促進する効果的な政策を進めてきました。

1990年の電力供給法制定で、再生可能エネルギーによって発電された電力が既存の電力系統へ給電できるようにな



「マインツ友の会」では、震災直後、マインツ市街地にスタンドを出し、習字や折り紙といった日本文化を提供し、募金活動を行いました(筆者は後列左)。

ると同時に、最低買取価格が導入され、再生可能エネルギー発電設備の所有者に利益がもたらされる仕組みができました。

この法律に替わって、2000年には、高い固定価格での買取制度が導入されました。買取りに係る費用は、すべての電力供給会社が平等に負担し、最終的に、すべての消費者が支払う電気料金に上乗せされます。設備所有者は、投資費用を短期間で償却し、高い利益を生み出すことが可能になったため、再生可能エネルギー設備への投資は魅力的なものとして扱われるようになりました。2012年に行われた連邦環境省による環境意識調査の結果によると、すでに12%の国民が再生可能エネルギー設備に投資しているそうです(2008年は2%)。

ドイツ政府が掲げる目標は、2020年までに全電力需要の35%を再生可能エネルギーで供給すること。そして2050年までには、その割合を少なくとも80%にすること。環境意識調査の結果でも、85%の人々が、化石燃料や原子力に代わる再生可能エネルギーの普及を望んでいることが分かっており、これからドイツにおけるエネルギーシフトの躍進は多いに期待できます。



マインツ市内のサッカーチーム「TuSマリンボーン」とのチャリティーマッチでは、ドイツ全国から日本人が集まり選抜チームを結成。選抜チームが3対2で勝利しました。



牛の涙

NO. 52

宮尾 彰

九十二歳になる大叔母が、高熱を出して入院しました。

病室は、同様に介抱が必要なお年寄りの四人部屋。週末の昼時には、それぞれの身内が看病に訪れ賑やかです。

隣では、壮年のご長男が母親の足をさすっています。

向いからは、転んで骨を折ったお婆さんが、

「なあ、もうちよっと、頭を上げておくれや」

と、娘さんに頼む声が聞こえてきます。

叔母に、匙で一口ずつ久しぶりの固形食を養いながら、私はその空気の内不思議な共同性を感じていました。

帰途の車中で、それがぶれジョブという市民活動（本誌第89号、92号参照）の中心をなす定例会と同じ安心感であることに思いました。

「アタッチメント（愛着）」という言葉があります。

一九六九年に、イギリスの児童精神科医ボウルビーが、母子の近接に代表される、人間の根本的な信頼関係の様式を示す概念として提示した心理学の専門用語です。

母親の傍らで、幼子が恐る恐る子犬と対峙しています。近づいては引き返し、また好奇心に駆られては近づき…。

ここでの母親は、不安に襲われた際、そこに戻れば必ず絶対的な安心を回復できる安全基地のような存在です。

膝枕で耳垢を掘ってもらったり、お風呂で背中を流してもらったり、手足の爪を切ってもらったり。

アタッチメントの形成は、先ず生命体として抱く欲求の充足に始まり、やがては精神的な支えとしての存在という高次の概念へと成熟してゆくものです。

最近とみに「愛着障害」という言葉を耳にします。

それが、乳幼児期の母子関係の課題に限定して論じられ、母親の子育てだけが批判されたり、成長の可能性までもが否定されるようなことになれば、大きな問題です。

職務で学校現場を訪ね、児童生徒へのかかわりや保護者との信頼関係づくりに奮闘する先生方からの相談を受けていると、そう痛感せずにはおれません。

『悩みを親にも先生にも友人にも打明けたことがない』と語る高校生や、『我が子をどうしても愛せない』と苦しむ母親が、この山裾の地方にも数多く潜在しています。

痩せ細ったブライドと世間体せけんてい。すべてを手に入れたかに見えて、その実、自分らしく生きるための自己肯定感や、無条件で身を委ねることのできる信頼関係は、幼少時以来一度も充たされたことのない大人たち。

「信頼できる他者との出会い」という運命の横糸と固く結び合わされたとき、私たちの人生に初めて、ゆるぎなく美しい模様が織りなされてゆくのです。

今、健全なアタッチメントを渴望しているのは、子どもより先に、この社会そのものではないでしょうか。

私たちは、国策の結果として引き裂かれ、踏み躪ふみおられたアタッチメントへの手当てすらない国の住民なのです。

或る日のこと、突然足元の地面が大きく揺れ、倒れそうになりました。やがて、揺れが落ち着くと、いつも自分に藁わらを運んでくれる二本足の動物がやってきて、優しく背中を撫でてくれました。

不思議なことが起こったのは、数日後でした。その動物が見たこともないような悲しい顔をして、仲間全員の前的大量の藁を置くと、すまなそうに立ち去ったのです。

その朝以来、彼らは目の前に現れませんでした。

やがて、餓え渴いた仲間が次々と身を横たえ始めました。自分の場所から動けぬまま、足の関節を折って崩れ落ちた姿で、彼らの胴体は腐り果ててゆくのでした。

牛の涙は、この国に生息する人間どもの荒涼とした仕業に対する憐憫れんぴんを示して、私の胸を深く抉えぐります。



母から伝わる食卓

夏場の定番に、青梅ジュースを

我が家は昔から夏場のジュースは母が作ってくれていました。

子どもの頃、シソや梅があまり得意じゃなかった私ですが、母のシソジュースや梅ジュースはとても美味しかった覚えがあります。濾した後にでたカスもジャムにしたり、小さめの洗濯ネットに入れお風呂に入れて入浴すると体がぽかぽか温まります。無駄のない自家製ジュースづくり、ぜひお試しください♪

<材料>

青梅（出来れば無農薬） 1 k g ・ 上白糖 1.1 k g
保存びん

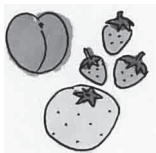


<作り方>

1. 新鮮な青梅を水洗いし、包丁の腹で梅をつぶす。
2. 保存びんに 1. でつぶした梅（果肉と種）を敷き詰め、砂糖を入れ、これを交互に繰り返す。
3. 1 日に 1 回、素手でよく混ぜ合わせる。砂糖が沈殿していたら溶かす様によく混ぜる。
4. 混ぜてプツプツ泡が出る様になったら、布などで濾して出来上がりです♪
出来上がったら保存は冷蔵庫へ。

季節にもよりますが、夏場はだいたい 10 日程度で出来上がります。

出来上がった梅ジュースはぬるま湯で割ると乳酸菌や酵母菌が活性化して体に良いと言われています。夏場はお水や炭酸で割って飲むととっても美味しいです。



また、青梅ではなくても、果実の合計量に対してお砂糖を 1.1 倍になる様にすれば色々なジュースが作れますので、お好きな果物でお試してください！

モスクワ便り



今日はクリミア半島の黒海沿岸部にある夢のような楽園のお話をしましょう。ロシアの有名な作家チェーホフも一時期住んでいたヤルタからさほど遠くない所にある植物園です。

植物園の広さは約 40 ヘクタール、ここでしか見られない植物が集められています。1812 年に創立され、ロシア最大規模の科学研究施設となりました。もっとも現在では、クリミア半島はウクライナ共和国の領土です。ウクライナはソビエト連邦の一部でしたが、1950 年代に当時の指導者がロシア領だった半島をそっくりウクライナ共和国に譲渡したのです。

植物園はその 2 世紀にわたる歴史の中で、百年以上も葡萄の栽培と葡萄酒の醸造に関わってきました。19 世紀には、葡萄は植物園の主要な研究テーマでした。1826 年に最初の学術的な葡萄のコレクションが企画され、ヨーロッパ・カフカス・ロシアから 300 種類の葡萄が集められました。葡萄はよく根付いて、クリミア半島は葡萄の栽培に適した場所であることが判明しました。クリミアは、ロシアの葡萄研究および葡萄酒醸造の『揺籃の地』となったのです。クリミア・ワインは 1873 年の第一回ウィーン万国博覧会、1900 年のパリ万国博覧会で権威ある賞を受賞しています。

ロシアのタバコの栽培もやはりこの植物園から始まりました。最初のプランテーションが作られたのは 1828 年です。当時のタバコは大量に輸出され、大きな利益を上げていました。じつはロシアのウイルス学は、120 年前にこの植物園で誕生しました。タバコの葉の病気の研究がきっかけでした。若き学者が研究の過程で、病原体がバクテリアだけではなく、顕微鏡でも見ることのできない微小な構造体であることに気付いたのです。こうして 1892 年にウイルスが発見されました。と言っても、これは理論上の発見でした。当時はまだウイルスを見ることのできる電子顕微鏡は発明されていなかったのですから。

現在もここでは生物学や医学の様々な分野の研究が続けられていますが、クリミアの人たちや観光客に親しまれているのは、黒海沿岸の素晴らしい憩いの場としての植物園です。なかでも有名なのは温室栽培のサボテンで、地球上のありとあらゆる場所から採集された千種類以上のサボテンを見ることができます。そして魅力的な竹林、人が足を踏み入れることもできないほどに、ぎっしりと隙間なく竹が伸びています。しかしもっとも素晴らしいのは薔薇園でしょう。二百年にわたって、色も形も大きさも多種多様な数千種類の薔薇が集められてきたのです。植物園中に花の香りが漂い、まるで天国にいるような心地がすることでしょう。

イリーナ・ニコラエワ（モスクワ事務局）

振替用紙のメッセージから



- ◎ 社会人になって初めてお給料をもらいました。少しですがお役立て下さい。
- ◎ 少額ですが、少しでもお役にたてばうれしいです。
- ◎ 亡くなった方がすっかりされないような生き方をするだけ。それしかないです。子どもたちも無理はしないでほしい。
- ◎ 一人の力は小さいけれど3・11を忘れずこれからも応援していきたいと思っています。
- ◎ どんなに考えても放射能とは、仲良くできない。若い人達、次の世代がとも気になります
- ◎ 検査の申込をさせて頂きました。ありがとうございます。
- ◎ 福島の子どもたちのために！
- ◎ 同封しましたお金は少しだけです。病の後に、施設で入居者のカットをして頂いて貯めたお金です。東北の被災者にお渡し頂けましたら幸いです
- ◎ まだまだ大変な生活をしている方が
- たくさんいらつしやると聞きます。支援に役立てて下さい。
- ◎ ご活動に感謝します。
- ◎ グランドゼロいつもお送り頂きありがとうございます。
- ◎ 高橋先生のご冥福を心からお祈りしております。福島のこともたちに明るい未来を…
- ◎ 南相馬の高橋先生がお亡くなりになったこととても残念です。闘病しつつ医療活動されました。ありがとうございます。
- ◎ いつもありがとうございます。何もお手伝いできず申し訳ありませんが、チエルノブイリ、イラク、福島のことを忘れることなく娘に伝えていきます。
- ◎ 4月の悲しみに3月が加わり原子力ノーへの思いをあらたに。
- ◎ 「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となる」ヴィンツェツッカー―大統領の言葉が心にしみます。忘

れないこと、あきらめないこと。

◎3月末で退職しました。退職金の一部を寄付します。役立ててください。

◎チエルノブイリの事故から27年目の日に福島のことから考えさせられます。10年前のピースウオークでイラク攻撃をしないように願っていたのに開戦してしまいました。今度こそ流れを脱原発へ！ JCFは医療支援皆さんの支えになっていることでしょう。

◎「グランドゼロ」にはJCFでしか持ち得ぬ重みがあります。伝わります。私も更にもっと強くなります。応援しています。4・26を大切にします。

◎支援はただただ続けることです。

◎3・11から学び、希望のある日へとチェンジすべきチャンスがふみにじられ、真逆の日本が構築されようとしている今、ささやかながら連帯させて頂き、与えられたいのちを全うしたいと思います。

◎全ての子どもたちに安心・安全な環境のなかで育って欲しい。ほんの少しですが力になれたらと思い、賛助会員に申し込みます。

◎グランドゼロ、楽しみにしています。

◎皆様の活動に感謝、少しでも長く続けていきたいと思います。

◎5月7日「ヴラダンコチコンサート実行委員会」より応援します。

◎お祭りで集まった募金を送金いたします。お役立て下さい。

◎福島から自主避難してきました。故郷のための活動を知り感謝しております。

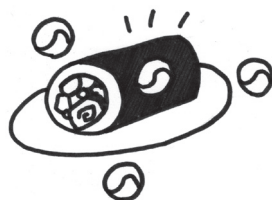
◎高橋享平先生のご回復を願っていたのに残念です。



Здравствуйте!

楽しく伝統食を作ってみよう!

坪根智美



3月に「伝統食を作ってみよう!」と題して、松本に避難してきているお母さん方を中心に甘酒を使ったお料理教室を開催しました。とても好評だったので今度は地元の方も交えて定期的に開催しようという事になりました!

第1回は6月24日にぬか床作りと、子供やぬか漬けが苦手な方でも食べられる調理法の提案。また浅漬け二種を総勢24名で作りました。

この企画は9月に甘酒を使ったお惣菜2種と甘酒ゼリー作り。12月には塩糍づくりと塩糍の鶏団子鍋、塩糍入りうどんづくりと続き、来年3月にはお味噌作りをします。

また、毎回食材やテーマに合わせたまめ知識もご紹介いたしますのでこちらも必見です!

このお料理教室で紹介したレシピは順次JCFのウェブサイト上の事務局ブログにアップ致しますので、当日お越しになれない方はぜひご自宅で作ってみて下さいね。

こんにちは！

古民家で奏でる

チェロコンサート

横内香苗



JCFに勤務して、がんばらないレーベルCD『ふるさとプラハの春』に出会い、「いつかは非松本でヴラダン・コチさんのコンサートをやりたい!」と思っていた。そのコチさんの演奏会が5月に信州大学医学部附属病院内で開かれることを知り、コンサートをアレンジしている山口さんに私のコンサート企画をお伝えした。山口ご夫妻は私の思いを受け止めて下さり、5月7日、松本市内の築百年の古民家「喜源治」でのコンサートが実現した。

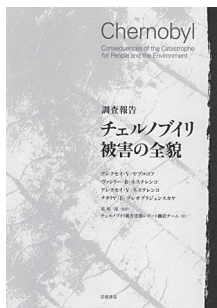
コチさんとその教え子であるヤナ・ヴェヴェルコヴァーさんとの息の合った演奏に、スタッフも含め60人の聴取が聞き入った。囲炉裏のある部屋を含め4つの部屋の襖を全部取り払い、どの場所からも演奏家が見えるように設定した。薄暗い中にスポットライトに照らされたお二人の姿勢と演奏が幻想的で心地よい。日本の曲「さくら、さくら」「早春賦」、ベンジャミン・ブリテン作曲の無伴奏チェロ組曲第3番など1時間半に渡った演奏会は深い感動を与えてくれた。日本の里山や古民家を体験して頂きたくてこの場所を選んだ。遠くに望む北アルプスのパノラマ、夜は囲炉裏を囲んでイワナやジビエ料理でもてなした。

兵役拒否のために投獄された経験のあるコチさんに「獄中でみた光は何ですか?」と尋ねると、「確かに神様がいる!と確信できたこと」と答えてくださった。コチさんの祈りと光の演奏はきっと世界の人々に伝わってゆくだろう。

CD『ふるさとプラハの春』(2500円)はJCFで発売中です!

チェルノブイリ被害の全貌 アレクセイ・V・ヤブロコフ、ほか

Book



調査報告 チェルノブイリ被害の全貌

著者：アレクセイ・V・ヤブロコフ

ヴァシリー・B・ネステレンコ

アレクセイ・V・ネステレンコ

ナタリヤ・E・ブレオブラジェンスカヤ

監訳者：星川 淳

訳者：チェルノブイリ被害実態レポート翻訳チーム

発行：岩波書店

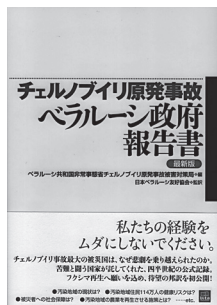
定価：5000 円＋税

本書は、多年にわたる調査研究と、ウクライナ、ベラルーシ、ロシアなど、スラブ系諸言語の文献を含む5千点以上の資料にもとづき、チェルノブイリ大惨事による被害の全貌を系統的に呈示した報告書である。

チェルノブイリ原発事故ベラルーシ政府報告書〔最新版〕

Book

ベラルーシ共和国非常事態省
チェルノブイリ原発事故被害対策局



チェルノブイリ原発事故

ベラルーシ政府報告書〔最新版〕

編者：ベラルーシ共和国非常事態省

チェルノブイリ原発事故被害対策局

監訳：日本ベラルーシ友好協会

発行：産学社

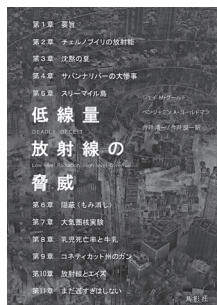
定価：2500 円＋税

本書は、チェルノブイリ原発事故から25年目の2011年1月にベラルーシ共和国非常事態省が刊行した『ベラルーシ政府報告書 チェルノブイリ原発事故から四半世紀―被害克服の成果と展望』の邦訳。2012年12月に東京で開催した講演会の内容も掲載。

低線量放射線の脅威

Book

ゲールド、ゴールドマン



低線量放射線の脅威

著者：ジェイ M・ゲールド

ベンジャミン A・ゴールドマン

訳者：今井清一、今井良一

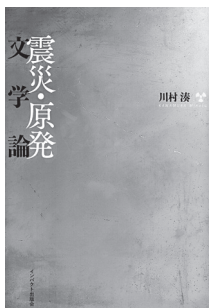
発行：鳥影社

定価：1900 円＋税

本書は、「低線量放射線」によって、心疾患、がん、白血病、感染症などの発症率と死亡率が、いったいどのように変化するかを、膨大な事実を積み上げる統計学的手法を駆使して明らかにしたものである（1990年初版発行）。原著者の一人、ゴールドマンによる鳥影社版への序文も掲載。

震災・原発 文学論

川村 湊



震災・原発 文学論
著者：川村 湊
発行：インパクト出版会
定価：1900 円＋税

Book

震災・原発を文学者はどう描いているのか。3・11以前、以降の震災・原発文学を徹底的に読み解く。付録として、「原子力／核」映画フィルムモグラフィ―全252作品を製作（公開）年代順に紹介している。

被災地から問う この国のかたち

玄侑宗久、和合亮一、赤坂憲雄



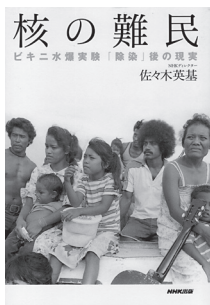
被災地から問う この国のかたち
（イースト新書）
著者：玄侑宗久、和合亮一、赤坂憲雄
発行：イースト・プレス
定価：860 円＋税

Book

3・11以降の「この国のかたち」を考えるときの根本的な問題は、この国のパワーエリートたちが全く「平時のシステムと論理」を変えようとしないことだ。原発震災の被災地・福島から魂の底から問う「この国の病根」。

核の難民

佐々木英基



核の難民
ピキニ水爆実験「除染」後の現実
著者：佐々木英基
発行：NHK 出版
定価：1600 円＋税

Book

本書は、2012年9月にNHK・BS1で放送された、ドキュメンタリーWAVE『除染された故郷へピキニ核実験・半世紀後の現実』を書籍化したもの。アメリカの核実験場となったマーシャル諸島の被曝者を軸として、アメリカと日本が「核」にどう関わってきたかを描くドキュメント。

Information

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は1991年1月に設立されました。1986年4月26日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCFは、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして2004年、活動の支援先はイラクへも広がりました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。



2011年3月11日の東日本大震災、そして福島第一原発の事故により、東北地方のみならず広大な範囲で放射線災害を受けました。JCFは事故直後から緊急医療支援、外部被曝線量測定、子ども達の診察プロジェクトを行ってきました。今後も子どもの検診や環境線量測定、食品汚染測定など、子ども達を被曝から守るための活動を続けます。

◆ JCF 会費振込口座

正会員年会費（1口）	10,000円
賛助会員年会費（1口）	3,000円
郵便振替口座番号	00560-5-43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

◆ JCF / イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入

郵便振替口座番号	00520-0-81078
加入者名	JCF / イラク支援



第 96 号

発行日 2013 年 6 月 26 日

発行人 鎌田 實

発行所

日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字 貝原 浩

イラスト 榎野ひかり

佐内朱

スタッフ 神谷さだ子

布山みな子

横内香苗

中澤啓子

坪根智美

協力 寺島仁美

J I M-N E T

風樹 光

印刷 電算印刷

■編集後記

事務局の水洗トイレが老朽化してロータンのゴムフロート弁が機能しなくなり、手でゴム弁を閉じないと水が止まらなくなってしまった。ビルのオーナーがウォシュレット便器に交換して下さるといふ。工事の過程で古い和式便器を取ると、水洗トイレとは、ただ小さな丸い穴が開いているだけだと知った。立派なウォシュレットトイレになった後も、いろんなものを「水に流した」最後は、あの丸い小さな穴が頼りなのだと思うと、何だか落ち着かない気持ちになる。新しい便器は水流もすごく計算されていて、少しの水が美しく渦を描いて諸々をさらっていく。ウォシュレットトイレは日本が誇る技術らしいが、あの丸い小さな穴のことも忘れてはいけないと思ったりする。(布山)

販売物紹介

Book

・「チェルノブイリからの伝言」

J C F 編 (オフィスエム) 1200 円

CD

・「小室等／ベラルーシの少女」

(8cm シングル盤) 1000 円

◆がんばらないレーベル C D

・「ふくしま・うた語り」

1500 円

・「ヴラダン・コチ／ふるさと」

2500 円

・「坂田明／ひまわり」

2500 円

ドクターかまちゃんの寒天ゼリー

1000 円

* 販売物の詳細は事務局にお問い合わせ下さい。



●特定非営利活動法人

日本チェルノブイリ連帯基金 (J C F)

〒 390-0303

長野県松本市浅間温泉 2-12-12

TEL 0263-46-4218 FAX 0263-46-6229

E-mail asama@jcf.ne.jp

Website <http://jcf.ne.jp>





お年頃

サブリーン・アブドルザハラさん

(15歳 バスラ)

バスラに住むサブリーン・アブドルザハラさん
今回家庭訪問をして絵をかいてもらいました。

今までも、闘病中にたくさんの絵を
描いてくれていましたが、

15歳の彼女は年頃になって、ちょっと反抗期です。